FB-4 No. 64

国際化 高齢化の進展と勤労青少年

(昭和58年度「勤労青少年福祉シンポジウム」記録)

勤労青少年のシンボルマーク

労働省婦人少年局

59/2

はしがき

勤労青少年の健全な育成と福祉の向上を図るため、勤労青少年指導者その他の関係者が一堂に会し、当面する諸問題について総合的に研究討議をするとともに、相互の理解と連携を深めるため開催している勤労青少年福祉シンポジウムは、回を重ね第１２回を迎えました。

昭和５８年度は、テーマを「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」とし、勤労青少年が活力ある社会の担い手として、また、国際化時代にふさわしい青少年として、広い視野と豊かな国際感覚を身につけて成長するための指導者の役割について活発な討論が行われました。

関係者の方々の明日へのよりどころともなるよう、ここにシンポジウムの記録を作成し参考に供することといたしましたので、御活用ください。

昭和５９年２月

労働省婦人少年局

目　　次

昭和５８年度勤労青少年福祉シンポジウム概要 …… 1

労働大臣あいさつ …… 3

特別講演「国際化時代を生きる」 …… 4

研究討議「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」 …… 21

各講師の問題提起 …… 21

全　体　討　議 …… 41

昭和58年勤労青少年福祉シンポジウム
概要

1　趣　旨

勤労青少年の健全な育成、福祉の向上に関し、全国の各分野で活動している勤労青少年指導者、その他関係者が当面する諸問題について総合的に研究討議を行うとともに、広く意見交換を行い、相互の理解と連携を深めるため、開催した。

2　開催日時及び場所

日時　昭和５８年１１月２４日(木)
　　午前１０時～午後４時

場所　東京都千代田区大手町
　　日経ホール

3　内　容

第１部

開会のことば

労働省婦人少年局長　　赤　松　良　子

あいさつ

労働大臣　　大　野　　明

昭和５８年度勤労青少年福祉功労者労働大臣表彰

特別講演「国際化時代を生きる」

千葉工業大学教授

エッセイスト　　木　村　治　美

第２部

研究討議「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」

司会・講師

昭和女子大学教授　　加　藤　地　三

講　師

フジテレビニュースキャスター　　有　馬　真喜子

財勤労青少年グループワーク協会事務理事	堀　添　勝　身
勤労青少年福祉推進者	
㈱不二家横浜工場	市　川　元　宏
勤労青少年福祉員	
東京都中小企業経営者協会事務局長	林　田　晋　司
滋賀県草津市勤労青少年ホーム館長	桐　畑　興嗣男

4　参加者の範囲

(1)　勤労青少年ホームの館長及びその他の職員

(2)　勤労青少年ホーム以外の勤労青少年福祉施設の職員

(3)　都道府県及び市町村の勤労青少年福祉担当職員

(4)　勤労青少年福祉推進者

(5)　勤労青少年福祉員

(6)　勤労青少年育成福祉団体及びその他の関係者

労働大臣あいさつ

昭和５８年度勤労青少年福祉シンポジウムを開催するに当たり、一言ごあいさつ申し上げます。

まずはじめに、日ごろ勤労青少年の福祉向上のため、各方面で御活躍いただいている皆様の御努力に対し、心からの敬意と謝意を表したいと存じます。

申し上げるまでもなく、次代を担う勤労青少年の健全な育成を図り、その福祉の向上に努めますことは、いつの時代においても重要なことであります。

我が国を取り巻く現下の諸情勢は誠に厳しく、経済成長の鈍化、人口の急速な高齢化など勤労青少年を取り巻く環境も大きく変化しております。また、青少年自身も、現在の高度産業社会の中で、自己に合った生き方を求め、創造性ある個性豊かな人生を送りたいという志向を強めています。

更に、１９８５年が国連の定める「参加・開発・平和」を基本テーマとする国際青年年であり、本年は、その行動期間に当たり、このため労働省におきましては、本年の勤労青少年の標語を「国際化高齢化担うは若い力と心―国際青年の年に向けて―」と定め、国の発展と社会への貢献のために勤労青少年があらゆる分野で十分に役割を果たすことができるよう、地方公共団体、事業主、育成団体と力を合わせて各般の施策を展開しているところであります。

どうか皆様方におかれましても、勤労青少年が活力ある社会の担い手として、また、国際化時代にふさわしい青少年として広い視野と豊かな国際感覚を身につけて成長するよう、引き続き御指導、御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

また、勤労青少年の福祉の増進のために多大な成果をおさめられ、本日、晴れの表彰をお受けになる皆様の長年にわたる御功績に対しまして、深く感謝申し上げますとともに、なお一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げる次第でございます。

本日ここに、木村治美先生をはじめ諸先生方をお迎えし、全国から関係者の皆様の御参加を得て「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」をテーマにシンポジウムを行うことができますことは、誠に意義深いことであります。十分な討議を尽くされ、今後の勤労青少年の健全な育成と福祉の向上に大きく役立つものとなることを祈念いたしまして、私のあいさつといたします。

昭和５８年１１月２４日

労働大臣　　大野　　明

＜特別講演＞

「国際化時代を生きる」

千葉工業大学教授
エッセイスト
木 村 治 美

［講師略歴］

昭和　７年　東京都生まれ
昭和３０年　東京教育大学英米文学科卒業
　　３５年　同大学研究科博士課程終了
４８〜５２年　２回にわたり家族と共にロンドン滞在
　　５２年　"黄昏のロンドンから"で第８回大宅壮一賞受賞
　　５４年　文部省派遣の夫君にともないパキスタンの首都
　　イスラマバードに滞在、先進国イギリスと発展
　　途上国イスラムの国を知る。
著　書　＝　「黄昏のロンドンから」　「新交際考」
　　「曙のイスラマバード」　「心の時代に」
　　「シンデレラコンプックス」（訳）ほか

皆さんこんにちは。ただいま御紹介にあずかりました木村治美でございます。今日の意義ある会にお招きいただきまして有難うございました。

本日は、「国際化時代を生きる」という題をいただきました。今、日本が物の時代から心の時代を迎えたと言われておりますが、それは地球的視野から見たならばどういうことなのか、私達は今、どういうところにさしかかっているのか、そんなところから話してみたいと思います。

私は４年前に、しばらくパキスタンで暮らしておりました。パキスタンにまいりますとき、一番最初に何をしたかと言いますと、地球儀を調べまして、パキスタンというのはどこにあるのかと調べることから始まったわけです。なぜパキスタンに行くことになったかと言いますと、私の夫がパキスタン政府に招かれ、パキスタンの子供達を学校に行かせるための親の動機づけ、モチベーションと言うそうですが、それを指導するために行くことになったからです。それを聞きましたときに「ああ、ついて行こう」と思いました。イギリスとか、アメリカとか、フランスとかは、自分から行ってみたいと思って行く所ですけれども、パキスタンというのは、いままでは話題性がありませんでしたのでこ

ういう機会でもなければ選んで行く所ではないということで、ついて行こうと決めたわけです。でもパキスタンというのはどこにあるのかと捜すことから始めたほど、私達にとって興味のない、縁のない国でした。

ところがパキスタンに行って私はびっくりいたしました。それは、パキスタンの人々の間に、熱い熱い日本への思いがふくらんでいたからです。私はパキスタンの人に、「なんでそんなに日本に好意を持ってくださるのですか」と伺いました。そういたしましたら、一番最初に出てきた答えは、チャンドラボースがお世話になった。これは、ある年齢以上の方しかおわかりにならないと思うのですけれども、チャンドラボースというのは、インド、パキスタンの独立の志士だった人です。イギリスの植民地から独立するときに働いた人で、しばらく日本に来て、日本にかくまわれていたことがある。そんなことを恩に着てくれている。それから、こんなことも出てまいります。プリンス・オブ・ウェールズを撃沈してくれた。あれによって、インド・パキスタンがイギリスから独立するのが１００年早くなった。そんなことを言ってくれます。私もそれを聞きますと、戦争中のことはもう話さないでほしいという気持がありますから、すぐ話を変えたくなるのです。その次に出てくるのは、ぐっと歴史が下りまして、アントニオ猪木を知っているかと言うわけです。「知っている」と言いますと、「アントニオ猪木は強いプロレスラーだ。インドの強豪をやっつけてくれた」。今は、インドとパキスタンは大変仲が悪いので、インドの強いプロレスラーをやっつけたということで、日本のアントニオ猪木は随分評判が高い人です。それから最後にこういうことが出てまいります。今、日本は素晴らしい工業製品を持ってパキスタンを訪れてくれた。確かにそういう目でパキスタンの町を眺めますと、走り回っている車の多くが日本の車です。まだテレビはそれほど普及しておらず、あの人達はラジオによく耳を傾むけます。そのラジオがほとんど日本製です。それから向こうの女性は、とても美しいサリーに似た布地をお召しになる。その布地がとてもエキゾチックできれいなので、これを１着分買って帰って日本の洋服に仕立てたら、日本の女性にちょっと差をつけることができるのではないかなと思って、布地のバザールに行きました。色とりどりの美しい布がありますので、どれにしようかと迷っておりましたら、パキスタン人のお店の親父さんが、私のことを日本人だと思って「どうだ、きれいなきれだろう。これは全部日本製なんだ」と言ったのです。パキスタンの人にとってみれば、これは日本製だから、素晴らしいから買わないかというつもりだったのでしょうけれども、私としては、日本人として日本製を買ったら様になるまいと思って、買うのをやめて帰ってきたのですが、ことほどさように、パキスタンの町には日本の商品があふれております。

ラホールという、日本で言えば京都のような町にまいりましたときに、私はこういうことに気が付きました。世界の名だたる国が、そのラホールという町に自分の国の文化センターを建てているのです。それは、アメリカとか、イギリスとか、フランスとか、そういう有名な国ばかりではなく、ブラジルとか、スウェーデンとか、そういう国まで自分の国の文化センターを建てて、文化の普及に努め

ている。日本の文化センターはどこにあるかなと見回してみますと、意外なことにこれが無いのです。日本は、文化センターをまだパキスタンに建てていない。私はそれを知りましたときに、何かお決まりの非難を受けているのではないかなと、大変心配でした。それは、日本は経済活動ばかりして、文化に心を用いない。物ばかり輸出するけれども、文化という心の面の交流はちっとも考えていない。そういう非難があるのではないかなと心配いたしました。けれども、パキスタンの人達は、まだ文化センターなどにはほとんど関心を寄せておらず、とにかく日本は素晴らしい、日本は物を輸出してくれて、素晴らしい商品を運び込んでくれて、何と素晴らしい国なんだ、こういうふうに感激しているわけです。そのときに私が思い出しましたのは、「衣食足りて、礼節を知る」という、日本に昔からある諺です。パキスタンという国は、まだ人間として生きるのに必要な衣・食・住という、そういうぎりぎりのものがまだ満たされていないんだな、まだ、礼節の方にまで心を向けるゆとりがないんだな、これが、パキスタンが途上国たるゆえんだなということが、しみじみと感じられました。パキスタンの人が礼節がないということではなく、生身の人間として、衣・食・住というものが十分に満たされたときにはじめて、礼節というものを心の面、文化ととりたいわけですけれども、そちらの方に気を向けるゆとりをまだ持っていない国民、これが途上国たるゆえんだなというふうに感じました。

ここで余談になりますけれども、「衣食足りて、礼節を知る」という諺の中に、どうして住が抜けているのかな。どうして「衣食住足りて……」となっていないのかなというのが大変不思議なのですけれども、皆さんはそれをどうお思いになりますか。日本の住宅事情は特別なので、住まで足りるのを待っていたら、なかなか礼節にまで回っていかないから、住を抜いたのかなとも思いますし、また、東洋的思想で、この世での人間は旅人であって、あまり住む所にはこだわらない、そういう哲学が日本にはあるのかなとも思いもしますが、あとで皆様にお伺いしたいと思います。

つまり、パキスタンという国は、まだ物に満たされていない。地方に行きますと、子供達ははだしで歩いております。今、小学校に通っている男の子は全体の５割であり、女の子はまだ２割に過ぎない。そして、パキスタン全体を見たときに、字が読める人が２割、そのぐらいの文化度であります。

私が自分に対して、皮肉な意味でうらやましいなと思いましたのは、パキスタンでは太っている人がほとんどいないということです。皆すうっとしていまして、余計な肉が付いている人はいないのです。私が観察したところによりますと、むっちりと太っているのは政治家、お医者さん、それから奥さんを２人以上持てる国ですから、２人目からの奥さんというのは大変太っております。それからコックさん。そういう方達が肉付きが良かったなということが印象に残っておりまして、パキスタンの普通の人達は、余計な肉なんか付いていない。そういうところからみましても、「衣食足りて、礼節を知る」という言葉が本当だなと思います。あの人達は、まだ文化センターには興味を示すゆとりがなく、日本がいろいろ運び込んでくれるものに興味をもっている。これが途上国なんだなとしみじみと感じて帰ってまいりました。

私は一方で、イギリスという国もよく知っております。イギリスという国、これは超先進国と言ってもいいでしょう。イギリスの人達に、「ご趣味は」と伺いますと、国民の3分の1ぐらいの人が、これが趣味ですと答えるものがあるのです。大変意外なものなのです。国民の3分の1が答えるというのですから、これはイギリス最大の趣味であり、私は、イギリスの国民的趣味と言ってもいいほどだと思うのですけれども、それは何かと言いますと、バード・ウオッチングなのです。野鳥観察です。皆さんはそれをお聞きになりますと、ああ、いかにもイギリスらしいな、本当にゆとりある国民だなとお思いになるでしょう。私もそう思います。皆さんの中で、バード・ウオッチングを趣味におできになる方はあまり多くはないと思うのです。バード・ウオッチングというのは、野鳥観察ですから、いらいらしていたら野鳥の方は飛んで行ってしまいます。公園とか森の中に行って、心静かに、こちらも木立ちの一部になったように心静かに待っていると、野鳥が飛んで来る。それでよく観察いたしまして、ああ、あの鳥は何時頃飛んで来るんだなとか、ああ、あの鳥の鳴き方はこういう鳴き方だ、しっぽの所が黒いな、そんなことを観察するわけなのです。私も年をとったらそういうことは趣味にできると思うのですが、今はまだそんなことをしていたら、いらいらしてしまう。こういうふうに思いますが、皆さんはいかがですか。とても心豊かな趣味ではあるかも知れないけれども、今の私にはできないなとお思いになる方が沢山いるのではないでしょうか。

イギリスの人達は、いまは大変質素な生活をして、趣味はバード・ウオッチングなどをしている。ところが、皆さんもご存じのように、イギリスは昔からそうであったというわけではありません。19世紀から20世紀の初めにかけて、いわゆるヴィクトリア時代と言って、イギリスが一番栄えた、華やかな時代には、あの人達の家の中には物があふれておりました。そして、進歩、発展をめざして、あらゆる工夫、改良が凝らされた。いわゆる便利用品が家の中にあふれていて、とにかくヴィクトリア時代に、部屋の中をメイドさんが掃除をする場所がないほど物が置かれていた。まるで、今の日本のような気がするのですけれどもイギリスにもそういう時代があったわけです。そういう時代を通り越して、イギリスの人達はもう物には飽きた。物では幸せが求められないことに気が付いた。こんな意味で、もう物に対する興味を失って、イギリスの人達は今はバード・ウオッチングなどをしている。私は、これが物の時代を通り過ぎて、心の時代を迎えたイギリスの姿だなということを、パキスタンを一方に置いて、イギリスという国を反対側に置きますと、その対比がはっきり見えてまいります。

イギリスの場合は、皆が福祉を非常に利用して、福祉に守られて、国民の3分の1ぐらいの人達が、労働意欲を失って、心豊かなバード・ウオッチングなどをしている。これはこれで、大変問題がある国だとは思います。「衣食足りて、礼節を知る」というのは、経済的裏付けができてはじめて、心の問題に目を向けるゆとりができるという諺であるとすれば、心のゆとりばかりを求めて、経済的裏付けの手当てがおろそかになるというのは、これは大変問題であり、そこに今の英国病と言われるイギリスの問題があるような気がいたします。とにかく、パキスタンという途上国を一方に置き、イギリ

スという先進国を反対側に置きますと、日本はちようど真中にあるな、そこら辺がよく見えてまいります。つまり、日本が物の時代から、心の時代に移りつつあるというのは、日本が途上国的な物の興味、物が欲しくてたまらなかった時代から、非常に豊かになって、その豊かさに守られて、心のゆとりを取り戻していこうとするそういう時代なんだと。今は、パキスタンとイギリスの、そのちようど真中に日本があるということがわかってまいります。

日本が今、心の時代を迎えたというのは、この地球的な規模でみますと、途上国から先進国に移行しつつあるのだということなんだろうと思います。私達、他の先進国よりは遅れて先進国になる人間として、大変得なことがあります。それはいろいろな意味で、先を歩いている人がある、お手本があるということなのです。つまり、英国病といわれるイギリスのように経済的活力を失ってはいけないんだ、いくら心の豊かさを求めても、経済的な裏付けを失ったらいけないんだということがよくわかると思います。

でも、イギリスの場合、心の問題を考えたときに、私はとても羨しいと思うことがございます。それは、イギリスという国は産業革命を、今の高度な技術時代を迎える下準備であった産業革命時代を、全部自分達で作り出してきた、かかわってきたということで、あの国は本当に素晴らしい国だと思うわけです。イギリスの産業革命は、今から二百数十年前に始まりましたが本当に一から、今の科学の時代とずっと付き合ってきた、全部自分たちでかかわってきた、そういう国はイギリスだけなのではないでしようか。

ロンドンにまいりますと、科学博物館があります。そこには、イギリスが過去に、産業革命時代に、どんな素晴らしいものを作り出してきたか、そういうものが展示してあります。例えば、ガラスのケースがあります。それを見ますと、マッチが現在の完成された状態になるまでに、軸にどういう工夫が凝らされたか、それから、あの頭の火薬の部分に、どういう工夫、改良が凝らされたか、その過程が、ずらっと展示されている。私はそれを見ると、イギリス人というのは、本当にマッチ１本を完成させるのに、こんな工夫、改良を、全部自分達でやってきたんだな、マッチというこんな便利なものがありますよとポイッと渡された国とは違うんだな、そこに何か、心と物とのかかわりで、大変大きな違いがあるだろう、こういうふうに感じます。

パキスタンは、私は先ほど、どのくらいの民度かと、民度という言葉を使っていいかどうか分かりませんけれども、どのくらいの国民の教育レベルであるかということをお話いたしましたが、識字率、つまり字を読める人が２割といったような国民の中に、もう既に原子力があるのです。私はそれを知って、随分問題だなと思いました。つまり、技術というものはすぐに移転するのが可能なのです。その２割の人の中には、大変教育レベルの高い人がおりますから、世界には原子力というものがある、高度なそういう科学技術があると聞くと、さっと持って来て、自分の国にそれを入れてしまう。そのことはとても簡単です。物はすぐに入るわけです。ところが、その高度な原子力とか、電子技術と、

それから一般国民との間にあるそのギャップ、この溝はいつ埋るのかな、パキスタンの人達は、本当にかわいそうな人達だな、こんなふうに思うのです。まるで、まだ子供なのに、大変高度なコンピュータのオモチャを与えられたようなものなんだなと。子供は本当は積木か何かで遊んでいて、だんだんに、成長と共に、難しいオモチャを手がけていけばいいのに、まだヨチヨチ歩きなのに、大変高度なオモチャを与えられてしまったようなもので、今の遅れて発展しようとする国というのは、大変な問題を抱えていると思いました。

それにつけても、日本はどうであったろうかと思います。日本が開国をして、西欧の文明を入れたのは、幸いなことにまだ西欧が蒸気の時代でした。科学に弱い私が見ても、蒸気の原理というのはやかんが沸騰している原理だなと理解ができます。それが蒸気機関に利用されているのを見ても、ああ、あの原理かとわかるわけです。そういう時代に、日本が西欧の科学技術を取り入れまして、それ以後は、歩調を揃えて、気持の上で技術の発展とかかわってこられたというのは、私達にとって、とても幸いなことだったろうと思います。それでも、皆さんがいろいろ考えてごらんになりまして、西欧文明が入ってきた、受け入れた、それまで全然自分達はかかわっておらず、自分達が作り出したものではない外国から入ってきたものを受け入れたんだという、そういう心の姿勢を、１００年以上経った現在も、まだ克服していないという、心配があるのではないでしょうか。

そういうことを考えますと、何もない所に原子力がパッと入ってしまったパキスタンに比べ、蒸気の時代にそういうことが行われた私達日本人は、まだまだ幸せだと思います。でも、何か私達は、いろいろ心の問題で矛盾を抱えています。すべてを先進国から輸入したパキスタンがあり、全部自分で作り出してきたイギリスがあり、その中間に日本を置きますと、この世界の中で両方の立場が見える日本の役割、そんなものもわかってくるのではないでしょうか。

日本は先進７か国の中に入れていただいております。入っております。だけれども、他の先進国だって途上国であった時代はあるのですが、それは、はるかな過去のことになってしまって、もう自分達が途上国だったことがあるなどということは、実感としては全く持っていないのです。ただ日本だけは、ほんの昨日の思い出として、途上国であった自分達を知っております。私自身は、はだしでは歩かなかったけれども、本当に途上国の子供として育ってきた、そういう記憶を鮮明に持っております。皆さんもおそらくそうだと思うわけです。そうすると、先進国でありながら、先進国の状況もわかるし、途上国の記憶もほんの昨日のこととして持っている。こういう日本、これは世界の中で日本しかない立場であるということを考えますと、日本独特の役割、途上国に対する役割みたいなものもわかってくるのではないでしょうか。

私は、途上国の人達に対するいろいろな経済的援助だの、科学技術の援助だのは、本当はしてあげないのが一番その国のためだと思うのです。何もしてあげなければ、その国は自分達なりのペースで、イギリスの産業革命にも当たる産業革命を一から始めていくでしょう。それがその国の人達にとり本

当は一番いいことなのだと思うのですけれども、この狭くなった地球の中で、そういうことは許されないから、なるべく私達のレベルに早く近づいてもらおうと思って、私達はいろいろな働きかけをする。それがいいことかどうかはわからない。しかし、そうしないわけにはいかない。私は、途上国の人達を見ると、お気の毒だなと思います。それは私達日本人が、昨日まで途上国であった人間として、いろいろな矛盾を肌身に感じて持っているからこそいえることなのです。

私達を取り巻く環境は途上国的な農耕社会から、あっという間に、ほんの数十年でこれだけ変わってしまいました。世界に冠たる西欧的な複雑な工業化社会になってしまいました。私達が今一番感じておりますのは、外側はこんなに数十年で速く変わってしまいましたけれども、人間の心はそんなに速くは変われないということです。まだ、私達は途上国の人間というか、農耕社会の人間の感覚のまま、こういう複雑な工業化社会を迎えてしまっている。そこにいろいろな矛盾があるのではないか。私達は肌身でその変化を感じてまいりました。あっという間に、私達を取り巻く環境は変わったけれども、どうも心の面では、まだ変わり切っていないという、私達自身が抱えている矛盾と、新しい文化の中で、農耕社会のことなんか全然知らない子供達が育っている。その子供達は、非常に矛盾を抱えた大人達に育てられている。私達自身が混乱を起こしているのはともかく、そういう大人に育てられている子供達も大混乱を起こしている。そういうところが、今の日本が抱える問題ではないかと思うわけです。

私達日本人は、「以心伝心」というコミュニケーションの方法を用いております。これは日本独特のものとは言えません。あんなにしゃべるのが好きでたまらない、言葉でなければ心は表現できないと思っているアメリカ人の会話にも、多少は、以心伝心的な要素があります。しかし、例えば私たちはこういう会話をします。「うまく表現できないんだけれど、ねえ、わかって」と言う。そうすると、「うん、わかる、あなたの気持よく分かる。」こう言ってくれる。こんな会話は、日本人の間ではそうは珍しくないわけです。皆さんも部下をお叱りになるのに、「そんなことは言わなくてもわかっているだろう、言われなければわからないのか」などとお叱りになる。言わなくても分かることを要求している。これも以心伝心的な要素ではないでしょうか。日本人は言葉を使っても独特なやりとりをいたします。例えば、皆さんの家にお客さんが来られたとします。「何か召し上がりますか」と皆さんが言うと、お客さんは、「いいえ、どうぞお構いなく。私は朝が遅かったから、おなかは空いておりませんし、こうやっておしゃべりしているのが楽しいのですから、どうぞお構いなく」と言う。お客さんがそう言っても、皆さんは「でもお昼だし、もうおなかが空いているだろう」と思うし、いろいろ複雑な配慮がありまして、それで陰に行ってお寿司屋さんに電話をかけたりします。お寿司屋さんが、「松、竹、梅のどれにしますか」と聞きます。竹くらいでもいいかなと思っても、みっともないことはしないようにと思って松を、特上を頼む。本当に高いお寿司が来て、高かったな、それにしてもうまそうだな、と心では思うけれども、それをお客さんの所にお出しするときには、皆さんは何

とおっしゃるか。「田舎でございますので、こんなものしかありませんけれども、お口に合いますかしら」などと心にもないことを言います。そうすると、「どうぞお構いなく。まだおなかは空いておりません」と言ったはずのお客さんが、「まあ、大変ご迷惑をおかけいたします。それでは有難くちょうだいいたします」と言って、ぺろぺろと食べてしまう。ちっともおなかが空いてなかったわけではないわけです。そういうようなやりとりをみてみますと、私達は日本人同士で、本当に複雑な言葉のやりとりをしておりまして、こちらの言葉をひっくり返して投げると、向こうもひっくり返して理解するし、また自分の心をひっくり返して投げてよこす。こちらもまたひっくり返して理解して、そんな作業が、本当に難なくできるのが私達日本人です。

私がイギリスにまいりましたのは、今から１０年前でした。今でこそ文化の違いはいろいろ言われておりますけれども、今から１０年前ですから、そういう文化の違い、言葉の使い方の違いみたいなものは、全然私は知らなかったのです。それで、イギリス人の奥さんにお招きを受けたときに、私は日本的にやったのです。「アイスクリームを召し上がりますか」と言ってくれたので、「どうぞお構いなく。おしゃべりが楽しいから、どうぞお立ちにならないでいてくださいまし」と言ったけれども、それでもアイスクリームは出てくるだろうと思ったのです。日本なら出てくるからです。ところが、イギリス人の奥さんは、「あら、そう。残念ね」と言ったきりそこを動かないわけです。いくら待っていても動かない。とうとう帰るまで、何にも出て来なかった。私はそういう経験を何度もしているうちに、英語というのは日本語と違って、その言葉ずばりが伝わるんだなということが、だんだんわかってまいりまして、それから私は、要るときには「要ります。ちょうだいいたします」と言うと出てくる。そのかわり、本当に要らないときには「結構です」と言うと、日本のように出されたから仕方なく、悪いと思って食べなければという情けない思いはしないですむ。本当に英語というのは、その言葉ずばりが伝わるのに対して日本語というのは、何と複雑な伝わり方がするのでしょう。京都では、その辺がもっと複雑なんだそうです。「寄ってお昼を食べていらっしゃい。」こういうふうに声を掛ける。けれどもそれを本気にしたら、末代までいろいろ悪口を言われるのだそうです。あれは本当の外交辞令にすぎないんだと。そういうことを踏まえていないと、京都ではお付合いできない。京都だけではなく、私達の間でも、多少そういうところがありまして、そういうやりとりは、本当に私達が共通の文化の上に立っているからこそ、そんな微妙なやりとりができるんだということを、イギリスとの比較で、私は初めて知ったわけです。

その共通の文化基盤なのですが、おそらく本日お集まりの方は、私と共通の文化の基盤の上に立って、そういう複雑な言葉のやりとりができる方々に違いないと思います。ところが、私はこの頃の若い人を見ると、「アイスクリームを召し上がる」と言ったときに、向こうは「いいえ、結構です」と言ったならば、それは本当に外交辞令としての結構なのか、本当に要らないから結構なのか、だんだんわからなくなってきています。この頃の若い人達は、自分の気持をはっきり言うものですから、だ

んだんわからなくなってきております。やはり文化の違う人間として、若い人に接して、「本当はどうなのよ」と聞き直さなければならないようになってきました。

「情けは人のためならず」という諺があります。これを、ここにお集まりの方は、私と同じように解釈なさると思うのです。あの諺は、「情けは人のためにあらず」ですね。それを、「情けは人のためならず」と言うのですが、それは、誰かに親切をすると世の中は回り持ちだから、回り回って、いつか自分も情けを受ける立場になる。だから、情けを誰かにかけるのは、その人のためというよりは、むしろ自分のためにもなるのだ、だからせっせと人には親切にしましょう、情けはかけておきましょう。ここにお集まりの方々は、ほぼそういうふうに解釈なさいますね。しかし「違う」という若い方がいらっしゃるはずです。私の調べたところでは、２０歳代を境に、その諺の解釈が正反対になっております。この頃の若い人達は、その諺をどう解釈するかと言うと、情けをかけるとその人のためにならない。人間は甘やかさない方がいいのだから、情けはその人のためにならない。情けは人のためならず、情けは人にかけるな、こういう諺だと解釈しているわけです。正反対ですね。私は若い人にそれを聞くたびに、「ああ、この頃の若い人は困るな」と、せせら笑うようなところがあったのですが、あるときふっと、高校１年生の我が息子に聞いてみました。「あなた、情けは人のためならず、という諺があるでしょう。あれをどう解釈するの」。息子は「それはねお母さん、人には情けをかけるなということでしょう」と言いました。それで私は愕然としたわけです。そこで、「母と子の会話」というはやりのコントを作ってみたのです。それは私が、ある問題について息子と話し合っているのです。ある人を助けるか、助けないかについて。私は息子に忠告するのです。「ねえ、情けは人のためならずという諺があるじゃないの」、息子が「うんそうだね。じゃあそうしょう」と言って、母と子の意見が一致するわけです。だけれども、一皮剝ぎ取ってみれば全然反対のことで意見が合意に達していたと、こういうこともあり得ないことではないと考えます。非常に極端な例を出しました。しかし、私の息子というのは、一つ屋根の下で、この私が手塩にかけて育てた息子なのに、「情けは人のためならず」という諺に関して、もう正反対の理解ができている。考えてみれば、私達の世代の人間はこの諺はこういう意味なんですよなどと正式に教えられなくても、何となくこの諺はこう解釈するのだという理解ができておりました。それが文化だったと思うのです。どこかで文化が今の若い子達に伝わらなくなっている。そういう言葉の問題を出していけばいくらでも出てくるのです。

「気のおけない人」という言葉があります。「彼は気のおけない人だから」といった場合、彼を信頼してもいいのですよ、気安くいろいろ相談などができる人なんですよ、つまり気のおけない人というのは、気がゆるせる人という意味です。ところが、この頃の若い人は、「彼は気のおけない人だから、警戒しなければいけない」。こういうふうに理解するわけです。

そういう言葉のずれたもの、正反対になってしまったものを洗い出していけば、沢山出てくるのです。その問題は国語の先生にお任かせするとして、何か私達は、同じ日本人でも、文化が若い世代と

断絶してしまった、どこかで大きな文化変動が起こってしまった、それを共通の文化基盤があるからこそ成り立つ言わなくてもわかる以心伝心に頼っていたならば、いつかふと気が付いたときに、足元をすくわれる恐れがある。そんなことを申し上げてみたいと思いました。

皆さんの年齢の半分以上の方は、大変口が重い方ではないかと思うのです。家庭にお帰りになって「めし」「風呂」「寝る」三単語亭主というのがあるのだそうですが、昔の男は、あまりぺらぺらしゃべるのは軽薄であるというような教育がありましたので、本当にどっしりと構えて、「めし」「風呂」「寝る」これですべて済ませる。こういう傾向をお持ちなのではないかと思うのです。私は、この「めし」「風呂」「寝る」で、夫婦のコミュニケーション、家族のコミュニケーションができた時代はあったと思うのです。それは日本が、まだ農耕社会で、おしんのような時代で、と言ってもそんなに古い話じゃないのですけど、ああいうふうに朝早くから夜遅くまで野良に出て、家族全体が協力して、食べるという共通の単純な目的のために働いていた時代は、常に家族は一緒にいる。夫婦が一緒にいるのですから、「めし」「風呂」「寝る」これで心のコミュニケーションはできたんだと思うのです。たとえば、あそこにかぼちゃがなっていてうまそうだった。もうそろそろ採ってもいい頃ではないかなどということを話さなくても、夫婦で、あそこにかぼちゃがなっている、採りどきだと大体わかっているわけだから、「あれ採るか」「ええ」それだけで、主語も何も要らないで通じてしまえるわけです。お互いに、同じ経験をして、同じ喜怒哀楽を持っていれば、本当に「めし」「風呂」「寝る」これだけで心の交流はできました。

ところが、先ほど申し上げましたように、私達をとりまく社会は、農業をしている人達の環境ですら、農耕社会ではなくなった。本当に複雑な仕組みの社会に変わってしまったのに、私達の心の面だけ、まだ農耕社会のままで、「めし」「風呂」「寝る」で通用していると思うところに問題があると思うのです。農耕社会というのは、単調な季節の移りかわりの中で、単調な仕事をしていた。ところがいま、夫婦はお互いに「行ってまいります」と言って出かけて行ったならば、「ただいま」と夜遅く帰ってきて、「ああ、疲れた。めし、風呂、寝る」、これだけの生活をしている家庭が多くなったと思うのです。そうだとするならば、何も伝わるはずがないのに、それでも農耕民族のまま伝わると思い込んでいる。私は、いまの日本人が考えなければならないことは、同じ世代を生きてきた夫婦の間でも、仲間の間でも、そして、私達とは明らかに違う時代を生きてきた親子の間でも、本当に以心伝心ができるのかどうかということだと思います。本当にそれで伝わっているのかどうかを再確認しなければならない時代になってきているんだと思うわけです。私はここで、「もっと言葉を使いましょう」と申し上げたいということなのです。以心伝心ではなくて、きちんと伝えることは、言葉で伝える。私達日本人にとっては、大変苦手な努力をしていかなければいけない。私は、国際化社会というのは日本の中にある、そういうふうに考えるわけです。外国との交流だけを考えないで、日本の中でもっともっと私達は国際化問題を考えていかなければいけないのではないかと思います。

ここで話を少し前に進めまして、本日お集まりの方は、男の方が大部分なので、特に女性の話をしてみたいと思います。私が2年前に、アメリカのニューヨークにまいりましたときに、一冊の本が大変なベストセラーになっておりました。それは、『シンデレラ・コンプレックス』というタイトルでした。そのサブタイトルが『自立を恐れる女性の隠された心理』というものでしたので、私はその『シンデレラ』という物語と、『自立を恐れる女性の隠された心理』という副題とを合わせて、その本を読まないうちに何が書いてあるのかピーンとわかってしまったのです。これは日本に持って帰って翻訳して、日本の女性に読んでいただかなければと思いまして、昨年の9月に出版いたしましたところ、やはり日本の女性の間で、大変なベストセラーにしていただき、今なお、毎週5,000部ずつ増刷されているという売れゆきですので、大変なロングセラーにもしていただきました。日本には、いろいろな若い人のための女性雑誌がありますけれども、その女性雑誌で何等かの形で、この『シンデレラ・コンプレックス』、シンデレラ願望ということを話題にし、特集にしなかった雑誌はないほどです。おそらく今の若い女性、いえいえ若い女性だけではなくて主婦達も、シンデレラコンプレックスという本を知らない人、そういう言葉を知らない人はないほどだと思います。今、女性の間で、大変話題になっている言葉、それはどういうことかということをちょっと説明したいと思います。シンデレラというのは、継母にいじめられ、お姉さん達にこき使われて、床を這いずりまわったり、灰まみれになって苦労していると、あるとき、素晴らしい王子さまが現われて、自分を王子さまのお妃さまにしてくれたと、そういうおとぎ話です。つまり、女性は口では自由だの自立だの男女平等だの格好のいいことは言っているけれども、心の奥底にはシンデレラになりたい願いがある。つまり、苦労していても、いつかは素晴らしい王子さまが現われて、自分を幸せにしてくれる。そういう王子さまの出現を待っているから、女性は最終的には一人立ちできないのだ、自立できないのだ、いつまでも甘えが残るのだということを書いた本が、『シンデレラ・コンプレックス』なのです。

その結論と言うべき部分に、大変感動的な数行があるのです。「自由や自立は、社会や法律や制度を変えて手に入れるものではない。ましてや男性から奪い取るものでもない。女性たち自身が苦労して、自分の心の中に育てていくものである。」こういう結論なのです。皆さんがそれをお聞きになれば、なんだ当り前ではないかと思うでしょう。ですけれども、それを今更のように一冊の本に書いて、今更のようにそれをなるほどとうなずかなければならないというところに、今までの女性運動の流れの問題があったのだろうと思います。皆さんは、ウーマンズ・リブ運動と聞くと、「いやだ。ああ、あの生意気な女どもか」と、ちょっと眉をひそめられるところがあるでしょうが、確かに今までの女性解放運動、ウーマンズ・リブ運動は、自分たちの外側を変えることによって自立できると思っているフシがあったようです。つまり法律を変えなさい。企業に対しては男女同一賃金にしなさい、雇用条件を平等にしなさい。それから皆さん方男性に対しては、皆が女性を認めないからいけないんです、皆さんの意識が、男女平等を認めていないからいけないんです、あなた達の持っている権利を女性に

もあげなさい。こういうふうに動いておりました。つまり、社会を変えることによって、男性から奪い取ることによって、私達女性は自由になり、自立でき、平等になると、そういう方向でウーマンズ・リブは華々しく動いていたのですが、お陰様である程度世の中が、女性に対して理解を示してくれるようになったいま、女性は、シンデレラ・コンプレックスという本をベストセラーにして、自由や自立を自分の問題として捉え、ああ、今度は自分達が変わっていかなければいけないんだと自分の心の中を見つめはじめたわけです。だから、ひとしきり賑やかだった女性解放運動に、その頃皆さんは、ひんしゅくすると同時に、ひやひやしていらっしゃるところがあったのではないんですか。ミリタリー・ルックの制服を作ったこわい女性などがいて、不心得な男性の所に攻撃をしかけておりましたから、皆さんとしても、いつ僕の所へ来るだろうと、首を洗って待っていらっしゃるようなところがあったのかもしれませんけれども、今はそういう運動がひっそりいたしました。ああ、あの運動は終わってしまったのか。女というのはあきらめがはやいな、あるいは、女というのは飽きっぽいな、こういうふうに思っていらしたかもしれないんだけれども、そうではなくて、今、女性のすべては、自分の心の中を覗き始めて、こんどは自分が変わらなければいけないんだと、自分自身の心を見つめはじめた時代なのです。外側に向いていた目が、今は内側に向きはじめた、こういう時代が、あと何年続くか、私にはわかりません。けれども、また今度は外側に目を向けて、外側の不備を変えるべく、出ていくときがあるでしょう。そのときこそ、内面的に充実した女性が出ていくのですから、皆さんの本当の驚異となるか、あるいは本当の協力者となるか、楽しみにお待ちいただきたいと思うわけです。

その『シンデレラ・コンプレックス』をお読みになった方が、いろいろな反応を寄せてくれたのです。男の方のなかにも読まれた方が沢山いました。おもに男の方達は、こういう驚きを発しておりました。シンデレラ・コンプレックス、男性依存願望。それが日本の女性にあるのはわかっていますが、アメリカの女性にもあるんですか。そういう驚きでした。皆さんもそうお思いになるでしょうね。私は、「そうです、あれを書いたのは、アメリカの非常に知的な女性が、自分自身の心の中にある迷いとか、悩みとか、葛藤を見つめることによって書いた本であり、それをベストセラーにして深くうなずいたのも、アメリカの女性なんです」とお答えするのです。「それを考えますと、アメリカの女性も、私達日本の女性よりもたいして先を歩いているわけではありませんね。」そういうふうに申し上げるわけです。それから、あとは女性からの反応で、「じゃあシンデレラ・コンプレックスを克服するにはどうすればいいんですか」。こういうふうな問いかけが、訳者の私の所に沢山寄せられました。確かにあの本には、じゃあどうすればいいかという処方箋は書かれてないのです。それではどうすればいいかということを、私なりに答えてみたいと思います。

何だ、女性だけの問題かとお思いになるかもしれないのですけれども、いえいえ、そうではないのです。女性のための『シンデレラ・コンプレックス』という本が、2年前にアメリカでベストセラーになった。その向こうを張った形で、今アメリカで男性を描いた本がベストセラーになっております。

それは何かと言いますと、『ピーターパン・コンプレックス』という本です。ピーターパンは、大人になりたくない男の子です。永久に子供のままでいつづける男の子がピーターパンなのです。ウェンディーなどという年上の娘が出てくるのに甘えたりなんかしているのです。おとぎ話ですから、影が取れてしまった。縫い付けておくれなどと言うと、ウェンディーが一生懸命、ピーターパンの影を足に縫い付けてやっているなどという話なのです。『ピーターパン・コンプレックス』、原題は『ピーターパン・シンドローム』というのですが、日本で、祥伝社が間もなく訳して発行いたします。『ピーターパン・コンプレックス』、今アメリカの男性の間で、男達も自分の本音を意識しはじめた。つまり、大人になりたくない本音をうったえはじめたわけです。特にアメリカの場合は、大人になるときに、兵役の義務があるわけです。兵役なんかやりたくない。それからまた、それを無事に終了したとしても、シンデレラにうろうろと取り囲まれて、大きな責任を背負わされるならば、もう大人になりたくない。子供のままでいたいという男達が、自分の本音を漏らしはじめた。こういうことなんだろうと思います。シンデレラになりたい女と、ピーターパンのままでいたい男が結婚したならば、どういうふうになるだろうと、いささか心配ではありますが、女も自分のたてまえでつっぱるのではなくて、本音を見つめはじめた。それに対して男も、本当はそんな責任を背負わされたくないんだという本音に気が付きはじめた。男の沽券などというものを捨てて、本音に気が付きはじめた。ここで初めて、男も女も本音をぶっつけ合って、それではどうにもならないから、ここは頼り合うというのではなくて、協力という形に持っていこうではありませんかというふうに、これからなっていくだろうと思うわけですが、とにかく、女も男も、本音を出し合ったということで、私は世の中は一歩大きく進歩したと思っております。

先ほどの話に戻りますが、どうして私達女性の中に、男性依存願望があるのか。アメリカの女性と言いますと、あのウーマンズ・リブ運動を推し進めたのはアメリカの女性ですし、キャリアー・ウーマンなどというそうそうとしたイメージがありますが、アメリカ女性も大して私たちよりも先を進んでいるわけではない。では、それはなぜなのか、それを克服するのにはどうしたらいいか、そんな話をしてみたいと思います。

その本にも書いてあるのですが、なぜ私達女性の中に、男性依存願望があるかと言いますと、それは生まれ育つ過程から、そういうふうに育てられるからだと言っております。例えば、男の子が生まれて、よちよち歩きをはじめます。転んでしまいます。そうすると、親達は、「あんたは男の子でしょう、メソメソしていてどうするの、早く立ちなさい」と自立を促します。女の子が転ぶと、「あなたは女の子でしょう、メソメソしてどうするの」とは、普通は言わないわけです。もっとやさしく、「あら転んじゃったの、大丈夫、お顔にけがしなかった、お顔にけがをするとお嫁にいけなくなる」と、そこまで言う人もないかもしれないけれども、親の心の中には、そういう思いはあるはずです。それからだんだん大きくなって、男の子が学校に行くようになって、成績がとてもいい男の子だとし

ます。そうすると、親は、「頼もしい子だ、頑張りなさいよ、末は博士か、大臣か」。この頃はそういうものに魅力があるかどうかわからないのですけれども、とにかく良かったね、頭のいい子で楽しみだね。こういうふうに言ってやります。ところが女の子が成績がいいと、「頼もしいね、頑張りなさい」とはあまり言わないです。「あなたが男の子だったらねえ」などと言うわけです。上にできの悪いお兄ちゃんがいたりなどすると、「あなたとお兄ちゃんと代わってくれればよかったのに」と言う。本当にそういうことを口に出して親は言いますよね。今度は成績が悪いと、皆さんは叱咤激励するでしょう。「男の子がこれでどうすんの、もっとやんなきゃ駄目じゃないの」と言う。ところが、女の子が成績が悪いと、皆さんはそれほどのことは言わないでしょう。「まあいいわ、女の子は成績よりも気だてだわ、明るくて、のびのびとしていて、皆に好かれるのがいいのよ、結局最後は、いいお嫁さんになればいいのだから」。いくつかの極端な例を出しましたけれども親がそういうふうに育てていけば、すべての女性の中にシンデレラ願望が根強く植え付けられてしまうとしても、これは不思議ではないと思うのです。つまり、そういうものは、生まれたときから、コンピュータの用語を使えば、インプットされているものならば、年頃になって、あるいは今の主婦達も、そういうことを大変話題にしておりますが、じゃあこれが具合が悪いんだから、これを脱ぎ捨てましょうというわけにはいかない。つまり、そういう育児をした親に責任があるし、また、そういう育児をするように育てた、そのまた親に責任がある。こういうふうに考えるわけなのです。そうすると、それは、一つの文化であった。女性がシンデレラ願望を持つのは、一つの文化の中の現象であると考えれば、それが克服されていくのには、非常に長い時間がかかるに違いない。アメリカですら、同じレベルをいま歩いている。それは当たり前ではないかな。こんなふうに考えるわけです。

ここで私の例をお話ししますと、私の母は、いま８３歳です。その頃の者として女性解放の意識には目覚めていたけれども、生き方としては手も足も出なかった。その娘にこういうことを言っていたのです。「女なんてつまんないもんなんだよ、女なんてね」と言って育てておりました。けれども、その娘の私が、女も大学に行けるようになった。しかも男の大学に行けるようになって、また就職もできるようになってきた。そういう時代になったときに、私はその道を進んで来たわけですが、周囲の反対がなかったわけではないわけです。大変反対されました。女が学問をしてろくな者にはならないと言われ続けておりました。親戚とか、近所の人に、「お嫁にいけなくなる」と言われておりましたけれども、その私を励まし、応援してくれたのは母でした。だから母は、自分は手も足も出なかったけれども、娘を応援するという形で、彼女は彼女なりの役割を果たしたんだと思います。私自身は、つっぱって、肩肘張って男の大学に入ってみたけれども、男ばかりで、女子学生というのは数人しかいないわけです。その中で、私はシンデレラになりたいという思いが半分あって、それでも頑張らなければならないという半分の気持で、もうシンデレラになりたい、それでも頑張らなくてはという意識で、右に左に、振り子のようにゆれ動き、エネルギーを無駄使いしながら、肩肘張って、何とかこ

こまでやってきたという感じです。

ところが、もう私の娘になると、そういうつっぱりは全く取れてしまって、自分で自分の人生を切り開いて行くのは当たり前だと思っております。そして、女性の連帯などという言葉を聞くと、「おかあさん、もうそういう時代ではないのよ」と申します。確かに彼女は男だから女だからという意識は全く取り去ってしまっているわけです。彼女はこう言うのです。「私は玉の輿なんかに乗ろうとは思わない、私は自分でお金持ちになるからいいわ」と言っています。やはり確実に違う世代の女性が育っている。それは私がそういうふうな育児をしたという自負もあります。自分の中にある問題を軌道修正しつつ、子供は違うような生き方をしてもらいたい。そういうふうに育てたという自負もあるわけです。

我が家の三代をみますと、母がいて、私がいて、娘がいる。三代がかりで我が家は変わっていった。つまり女性の依存願望などというのは、そういう文化の中で培われているものであるとすれば、それが変わろうとするのに三代がかり、そのぐらいの長い時間をかけていただきたいと思うわけです。少しずつ、一代ずつ変わっていけばいいのだろうと思います。私達女性にとって、変わろうとするその流れにたいして、皆さんの男性社会というのは、まだ同じ方向に流れ続けている。その間で、大変大きな水しぶきが上がるのは、これは当たり前なのであり、私達がかくあれかしと思う男性像があるとして、そういう男性を育てるのが、私達女性であるとすれば、男性の進歩と進化は女性の進歩と進化より一代ずつ遅れていくということで、私達は今の時代の女性にとっては、大変歯痒い時代を生きているわけです。今の時代を私達はそう捉えているわけです。

でも、そのシンデレラ・コンプレックスにつきまして、アメリカでも日本でも、女性の現在の意識は同じレベルなのだと申しましたけれども、私はやはり違うところがあると思います。それは、シンデレラ・コンプレックスという本を書いたアメリカの女性は、すべて自分の心を見つめることによって、あの本を書いているわけです。その自分を見つめる目の凄さ。それに、私達はびっくりするわけです。本当は、そんな男性依存願望などというのは、気が付かないふりをしていたい、人に見せたくないのはもとより、自分自身にだって臭いものには蓋をして、そんな不都合なものはないふりをして生きていようと思えば生きていられる。けれども、それを怖めず臆せず、自分を見つめたという、その目の凄さに私はあの本の価値を捉えているわけです。その点において、私はやはりアメリカとか欧米諸国の人に、あるいはすべての諸外国と言ってもいいと思うのですが、その点にかけてはかなわないと思っております。なぜ私達が、自分を見つめるという姿勢に欠けるかというと、それは以心伝心が災いしているような気がするのです。「ねえ、うまく表現できないんだけれどもわかってよ」「うん、わかる」とわかり合えてしまうということ。つまり、自分でうまく表現できないということは、自分でもよくわかっていないということなんだろうと思うのです。言葉という、非常に合理的論理的なもので表わすには、自分の心がきちんと捉えられていなければ言葉にならない。それを切実に感じ

ましたのは、私が外国に行きまして、小学生の二人の子供を現地の小学校に連れて行ったときなのです。私の子供達は、英語は一言も話せないのですけれども、向こうの校長先生は、公立ですから空きがあるから入れてあげましょうと言ってくれたわけです。私は親として後ろ髪を引かれる思いですから、置いてくるに当たって、「どうぞよろしくお願いします」と言おうとして、そこではたと詰まりました。私は、英文学の教師をしておりますけれども、どうぞよろしくという言葉が出てこなかったのです。何を頼もうとしているのかとぐっと詰まったわけです。これが、相手が日本人の校長先生であれば、「どうぞよろしくお願いします」と言ったら、「はいわかりました」と言ってくれる。けれども、何を頼もうとしているのか、英語ではそれがはっきり捉えられていなければ、頼めないわけなのです。よろしくなどという言葉が英語にはないのです。それで私は、自分はここで何を頼もうとしているんだろうか、まったく自分の心がつかめていないことに気が付きました。日本に帰ってまいりまして、ああいうときには一体どう言ったらいいのかなと、永年疑問に思っておりましたけれども、この間、フランソワーズ・モレシャンさんにお会いしたときに、お聞きしてみたのです。「こういうときには何と言ったらいいのですか。何を頼んだらいいのですか」。そうしたらモレシャンさんは、日本の事情も知っていらっしゃる、外国のことも知っていらっしゃる方ですから、すぐに答えてくれました。そういうときにはこう言うのです。「私は、あなたの学校とあなたを信頼して、子供達を置いていきます」と。こう言えばいいんだと言うのです。なるほどと思いました。けれども、もしそう言えばいいということを知っていたとしても、こちらはそんな言葉が出てきたかどうか、とにかく恐縮しきっていて、ご迷惑でしょうがという気持があるので、私は権利として、あなたとあなたの学校を信頼して、この子供を置いていくなどという大きなことが言えたかどうか、それはわかりませんけれども、とにかく私達は、「どうぞよろしく」などという言葉で済ませてしまって、本当は何を頼もうとしているかあいまいなままです。「信頼して置いていくのだ」「はい、いいですよ」と校長が言ったときに、そこに契約が成り立つんだ、というような国際社会の中で、私達はそんなあいまいな意識で暮らしていけるのかどうか。

もう一つ、私がイギリスに暮らしておりましたときに、いつも困りましたのは、「すみません」という言葉なのです。私達は日本で「すみません」という言葉を、本当に気軽に、日に何度となく使うわけです。ところが私は、ロンドンで生活していて、「すみません」という言葉に、さまざまな意味があることに気が付きました。「本当に悪うございました、すみません」と謝るときがあります。それは「I'm sorry.」です。それから、「すみません、ちょっとどいてください。」「すみません、これをやってください」などというように、自分の意思を通そうとするときには、英語では「Excuse me」と言わなければいけないでしょう。それから、何か素敵なものをもらったときに、「ああ、すみません、こんなことをしてもらって」と言います。そのときの「すみません」は英語では「Thank you」なのです。それから、「ちょっとすみません、駅へ行く道は」などというときには、この「す

みません」は呼びかけにすぎないわけです。だから「Hello!」とか、何とかになるわけです。私達は、そういうものを全部一緒くたにして、「すみません」で使ってしまっている。英語にするときには、これを分類しなければならないのです。ところが、いざ分類してみますと、分類し切れないのです。何か素敵なものをいただいたとき、「あら、すみません」というときに、「Thank you」だけでは割り切れない。やはり、「こんなにお金を使わせて、気をつかわせてしまって悪いことをしたわね」という謝る気持もあるし、感謝の気持ももちろんある。そういうものをすべてひっくるめて、私達はいつも「すみません」と。それから、「すみません、これをやってくれないか」と言うときにも、「Excuse me」だけでは捉えきれない。やはり、やらせてしまって悪いけれどもという謝る気持もある。そういう複雑なものすべてが、「すみません」に入っているのだけれども、英語にするときには、それを分解していかなければいけない。皆さんは多分英語が苦手だとおっしゃるかと思いますけれども、それは皆さんに英語の能力がないのではなくて、そういう気持と言葉との、その調和に悩んでいらっしゃるんだろうと思います。分類し切れない心の扱いに悩んでいらっしゃるのだと思います。これから国際社会になり、あらゆる分野での国際化が行われていくわけですが、結局は、私達は以心伝心であまりにもすべてを済ませすぎていて、本当に自分の心を、言葉できちんと確認する作業を怠っているという落とし穴にはまっている。国際化という問題は、外国人とのお付き合いだけでなく、いまや日本人同士の間でも、夫婦の間でも、世代の違う者同士の間でも、お互いに持っている文化が違うという意味で、日本の中にあると思うのです。もっと言葉で自分を表現する習慣を付けていかなければいけない。そうしないと、伝わると思っていたものが伝わらない。コミュニケーションという言葉がしきりに言われておりますが、コミュニケーションというと、すぐ、心と心の触れ合い、それが出てくるのですけれども、それには大切な、大変重要な、前の段階が抜けていると私は思います。つまり、自分の心がつかめない、自分の心が把握できないで、何をもってふれあおうとするのか。コミュニケーションの第一歩は、言葉で、意識できちんと自分の心をつかむ、それからであると思います。国際化の問題は、自分自身の中の問題であり、日本人同士の間の問題であって、それから外国のことに自然に移っていくだろうということで、私の話を終わらせていただきます。

＜研究討議＞

「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」

司会 講師	昭和女子大学教授	加藤地三
講師	フジテレビニュースキャスター	有馬真喜子
〃	(財)勤労青少年グループワーク協会専務理事	堀添勝身
〃	勤労青少年福祉推進者 (株)不二家横浜工場	市川元宏
	勤労青少年福祉員 東京都中小企業経営者協会事務局長	林田晋司
	滋賀県草津市勤労青少年ホーム館長	桐畑與嗣男

＜各講師の問題提起＞

加藤（司会）　私はどういうわけか、労働省のほうに見込まれまして、ここのところ数年シンポジウムの司会をやっておりますので、壇上からみていましても、去年もいらっしゃったな、3年前もいらっしゃったなという方がいらっしゃいます。今回もよろしくお願いいたします。

このシンポジウムは2部構成になっていまして、前半が壇上の先生方の意見の発表をいただきまして後半は皆様方と私たちの間で意見交換、質疑等をいたしたいと思います。

今日のテーマは、御案内のように「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」ということでございます。皆様方のお手元の資料の最後のページを御覧いただきますと「国際化、高齢化、担うは若い力と心―85年国際青年の年に向けて―」という今年の勤労青少年の標語が書いてありましてその下にいろいろ書いてありますが、1985年は昭和60年になるかと思いますが、国際青年年でございます。昨年から行動期間になっておりまして、再来年1月から始まります国際青年の年に向けていろいろ論議を高めよう、青少年の自覚を高めようということで、今、労働省だけではなく各都道府県も準備にかかっていると思います。おそらくここに来ていらっしゃる勤労青少年ホームでも来年あたりから国際青年の年ということを念頭におきながら、いろいろな行事をなさることになると思いますがこのシンポジウムはその行動期間の皮切りの行事として受け止めていただいてもよろしいのではないかと思います。

私ども国際化時代に入ったなどということをよく言っておりますが、一体国際化とはどういうこと

なのか、いい加減に言っている場合が多いと思います。大変難しい言葉でございまして、私たちのたとえば食べるものなどはほとんど輸入食料に依存しております。

お隣りの農協ビルの下に地下鉄の駅が入っておりますが、階段を上がったところに牛肉とオレンジの自由化の拡大を阻止するといったポスターがありました。平和な草原地帯に牛がゆうゆうと草をはこんでいる絵がありまして、そのこちらに大平洋が広がっていてオレンジと牛肉を乗せてきたアメリカの船らしいものがそこでストップさせられているというものでした。

こういうふうに食料の国際化のなかで日本の産業を守らなければならないというような問題、先だってアメリカのレーガン大統領が来られたときにもそういった食料の国際化の問題のトラブルということが議論になったかと思います。

それから、いま、青年に限らず日本人がたくさん海外に出かけておりまして、ひところは外国に行ってきたなどと言うと「おまえ、洋行してきたのか」などということになりますし、羽田から飛行機が出ている時代は私どもたまにひとの見送りに行きますと、たくさんののぼりが出ていまして、何とか君ヨーロッパに行くなどと言って水盃を交わしてまなじりを決して死ぬかもしれないなどという悲愴な顔で出ていった時代がありました。けれども、いまはもう簡単にバッグ一つの身軽な恰好で出ていくひとが多くなりました。大変な数の日本人が、海外に出かけていくようになりましたし、また入ってくるひとたちも大変多くて、大手町はあまり見かけませんけれども、お隣りの銀座あたりに行きますと、たくさんの外国人が歩いていて、電車のなかなどでも一緒になる機会が非常に多くなっているわけです。もういまは、もし大きな戦争でも起りますと、たちまち日本経済などストップしてしまうというほど諸国間が非常に緊密になっている。それが国際化時代ですが、果してそれでは我々日本人というのは国際化しているか、国際化のマインドを持っているかというと、なかなかそうではないような気がいたします。

先ほども話をしていたのですが、私たち日本人がたくさん海外へ出かけますけれども、グループを作ってどこの国に行ってもその国の言葉は話さないという固い信念を持って、日本語だけで旅行をしてきたといって、いばって帰ってくるという、日本人も大変多いわけです。

それから、「小さな国際人」などという名前を持っておりますけれども、外国で幼稚園とか小学校、中学校で勉強した私たち日本人の子供が、日本に帰ってきますと、「帰国子女」などという変な名前で呼ばれて、日本の公立学校になかなか入れてくれないという問題があるわけです。入ってもたとえば英語なまりの日本語を話すような子供がいますと、日本の仲間たちから変な目で見られて、「おまえ、英語で泣け」などといって、ぶたれたりするような子供も出ているわけです。そういう点では全く国際化していないということが言えると思います。国際化のなかに身をおきながら我々日本人はなかなか国際化できない。これは、ただ単に言葉がうまくなれば国際人だなどということではなくて、南も北も東も西も、どのひととも胸襟を開いて話しあえるということも必要だろうけれども、その国

がどういうことになっているかということについて、我々が理解する必要があるかと思います。

資料の２２ページに「地域別国際交流事業派遣者数」といって棒グラフがありますが、これを見ておわかりのとおり、北アメリカとかヨーロッパ、アジア、オセアニアというところは比較的たくさんの青少年が行っておりますけれども、南アメリカとかアフリカともなりますとほとんど行っていないというようなことで、大変アンバランスが目立ちます。これが本当に国際化時代の姿なのか、ということを疑問に思います。

その上に細かい数字がたくさん並んでいる表の、派遣事業と受入事業というものの合計のところを見ますと、派遣するひとと受け入れたひととのギャップも大変ひどくて、受け入れの５倍ぐらいは派遣されているという、これも片方貿易になっているわけです。そういうことで、まだ国際化時代といってもたくさんの問題があるような気がいたします。

もう一つのテーマの高齢化の進展ですが、これは私たち、みなさまが働いている職場で現に起っている問題でして、定年が延長される職場が多くなってきて、かっては５５歳定年がいまは６０歳ぐらいになっている。６０歳以上の人でも、おいてやるというような企業が多いし、また、中高年の再雇用で、働く老人がたくさん増えてまいりました。

実は、私も今年６０歳になりまして、厚生年金を今年からいただいているわけで、高齢者の１人になったというような感じがするわけですが、同じ職場で若いひととの交流がなかなか難しい面があります。意識が違うし、定年になりますと昇給が打切られて給料が安くなる。自分よりも若いひとのほうがたくさん給与をもらっているという場合に年寄りとしては若いひとたちとどう付合ったらいいかという難しい問題がありますし、若者としても職場のなかに入っている年寄りとどのようなコミュニケーションが可能なのかというような問題もあります。

資料の２０ページには「高齢化進行に対応する青少年対策の内容」という棒グラフがありますが、これを見ますと各々の事業所ではそれぞれ青少年対策をたてていらっしゃるところが大変多く、ここに書いてありますようにもっと若手をたくさん人事面で登用するというのがいちばん多いわけですが、中高年年齢者との意思の疎通を計る。どういう方法かはわかりませんが同じ職場にいる高齢者と若者とのコミュニケーションを、風通しをどうしたらよくなるかなどということも事業所の大きな問題になっています。今まで日本の企業が抱えたことのない大きな問題が高齢化の問題ではないかと思います。

そういうような国際化と高齢化の進展に伴って青少年を扱う私たちとしては、どのような意識であるいは考えで若いひとたちに接したらいいかということで今日のシンポジウムを行いたいと思います。

それでは有馬真喜子先生からよろしくお願いいたします。

有馬　私はこの会に参加させていただくのは初めてでございます。その上、勤労青少年の問題に関しましては専門家でも何でもありません。

今日ここにお集りの方々は、みなさまそれぞれ専門家でいらっしゃる方々ばかりでございますので、私のような者の申し上げることがなにか御参考になるかどうか全く心もとない次第ですが、ただ、私はジャーナリストとしましてこの仕事を始めて２６年になりますが一貫して取材をする立場におります。ジャーナリストというのは、どこにでも首を突っ込む人種でして時によると突っ込まなくてもいいところまで首を突っ込んでいるという非難を受けるわけですが、ともあれ取材をしながらいくらか時代の流れとか時代の移り変わりを見てくる機会が多かったのではないかという感じがしております。そこで、そんなことから少し話させていただきたいと思います。

まず最初に申し上げさせていただきたいことは、これから２１世紀に生きる若者というのは本当に大変だなという感じがいたします。それは、私たちの若い時代というのをふり返ってみますと、私はいわゆる戦後民主主義の世代に属する人間ですが日本の国全体が国を建設する、破壊された国を興していくという、つまり創っていく時代にあったというふうに思うのです。物事を創っていく過程に参加をするということは、大変活気のある生き生きとした、人に創造の喜びをもたらすものでして、そういう意味で私自身は自分の若いころをふり返って、何もないたいへんな時代でしたが、同時にある懐しさ、ある幸福感というものをもって見返すことができるという感じがするのです。

それでは、これからの時代を背負っていく若者たちの手に残されているものは何かといいますと、それは創っていくということよりはむしろ物事を維持していく、保っていくということではないかという気がするのです。つくり上げる過程は高度成長経済を通じて、大体、一段落している。そうすると、できあがったものをどうやって保っていくか、どうやって持ち続けていくのかということが若者たちの手にあるわけで、それはつくり上げることとは全く別のことでして、それに要する資質といいますか、そこに要するエネルギーの質というものを考えていかなければならないのではないかと思います。維持する、保つというのは大変忍耐と努力を必要とすることで、創り上げていくことよりもむしろ大変なのではないか。そういう意味での、若者たちの生きていくこれからの厳しさみたいなものを感じさせられるわけなのです。まず、そのことを指摘しておきたいと思います。

その２１世紀、これからの時代を象徴するのが今日のテーマに掲げられている国際化高齢化というものだと思います。只今、加藤先生が国際化高齢化の内容については詳しくご説明なさいましたので、私はこれ以上触れません。国際化というのは自分の国だけが一生懸命努めていればそれでいいというのではないということを含みます。あるいは高齢化ということは現在、日本では１００人のうち１０人が６５歳以上と言われております。高齢化社会というのをどういうふうに定義するか、国連などでは１００人のうち７人という定義をしておりますが、いわゆる豊かな先進国では１００人のうち１０人くらいまでは高齢化社会の問題が起きてこないと言われ、それより、もう少し６５歳以上の人口の

数が多くなってくると高齢化社会の問題が発生してくると言われております。若者たちが支えていく時代というのは１００人のうち１５人あるいは１７人が６５歳以上であるという社会で、それは高齢化社会の問題が非常に顕在化した形で表われている社会です。そういう点でこの２つのテーマは若者の上に大きくのしかかる２１世紀のテーマであると思うのです。

それを踏まえて、どういうことをこれから考えていったらいいかということを私なりに幾つか上げさせていただきたいと思うのです。その１つは国際化といい、高齢化といいますけれども、それはつまり若者たちが世代の違うあるいは民族の違うひとびとと付き合うという、どこか気心のしれないというか、よくわからない部分を持ったひとびとと付き合うということであると思うのです。いわゆるコミュニケーションというようなことが言われ、今年はコミュニケーション年ですが、人々と付き合っていく技術といいますか、方法論が今のところ十分開発されていないのではないか。とくに気心のしれない人々との付き合い方というのが十分私どものものになっていないのではないかという気がいたします。そのことが第一です。とくに今の若いひとたちは、小さいときから家庭の人数が非常に少ないなかで育てられているというようなこと、あるいは学校で一人一人が切り離された競争関係にあるというようなことで、人々との付き合い方が大変下手であるということが言えるのではないかと思うのです。資料ページに、「若者たちの相談の内容」というのがありますが、それを見ておりますと職場の人間関係を訴える若者が非常に多いということが指摘されています。そのへんの人間関係、人と人との付き合いというものについて心を配っていかなければならないのではないかという気がするのです。

２番目にコミュニケーションする方法ですが、それは今までの方法をそのまま適用していったらいいのかというと、私は必ずしもそうではないのではないかという気がしております。それはなぜかといいますと、私は今年５０歳になりましたが、私自身のことを考えてみますと、では気心のしれない人々、どこかわからない部分を持った人々との付き合い方、理解の仕方が上手かというと私は自分は下手であると思っております。私たちの世代が培ってきたというか、教えられてきた人間関係、コミュニケーションというのは例えば上下関係であるとか仲間内だけの通じあいであるとかというものであって、それをもう少し広げて世代の違うあるいは民族の違う、国が違うというところまで広げていくことに関しては私たちは十分習熟をしていない。これからの若者たちのほうがそれを獲得する可能性を十分持っているのではないかという気がするわけです。それは何かといいますと感性の豊かさでして、感性の豊かさという点に関しては私たちの世代よりも若者の世代のほうがはるかに発達しています。そのへんで何かわかりあえる方法を作り上げていくことができるのではないか。それはこれまでの私どもにあるものとは全く違ったものではないかというような感じがするわけです。

３番目には、コミュニケーションの手段としまして私は一つ大事な要素になるのが技術というものではないかという気がしております。世代の違う人々と付き合う、あるいは民族が違うということは

言葉も違うわけですが、その人々と付き合うときに、先ほど加藤先生は言葉の重要性ということを指摘されましたがそれと共に具体的な技術が大切だと思います。わかりあえるというようなことを漠然と考えるのではなくて、例えばガラスならガラスの器を作っていくという技術、あるいは農業で畑を耕すという技術など、何か核となる具体的なものをもって理解をしあうということが、世代間に関しても民族の間に関しても大切な要素として浮び上がってくるのではないかということを考えるわけです。これについては時間がありましたら、どういうことかということをもう少し具体的に話させていただきます。

加藤　有馬先生はコミュニケーションの必要なことを力説なさいまして、感性の豊かな今の若者は私たちよりも外国人と付き合う方法がうまいのではないかというようなお話だったのですけれども、今たくさん東南アジアから留学生が日本にきておりますが日本の家庭で預った場合に長くもって6ヶ月だということが言われています。6ヶ月ぐらいたつと出ていってくれということになって三軒茶屋あたりにもたくさん東南アジアの留学生がおりますけれども、下宿を転々としていて結局留学生の寮にまた舞いもどってしまうというようなことで、そういう点も我々の世代は大変下手だったのですけれどもこれからの若者たちは民族の垣根をのりこえて、付き合っていけるのではないかと私も思います。

堀添　大変テーマが大きい上に、限られた時間ですので、私の場合海外とかかわりあいといいますか、援助活動の体験を話させていただき、そこから学んだものをお話させていただきたいと思います。

特別講師の木村先生から、パキスタンとイギリスの話が出たのですが、みなさんはモルジブ共和国という国をご存じでしょうか。あまり聞いたことのない方がほとんどだと思います。最近、チラチラと観光というようなことで、テレビに出たりしておりますが、私どもは、日本人になじみのうすいこのモルジブ共和国というところに、「1円玉募金運動」という形で、お米をプレゼントいたしております。3年ほど前が国際児童年で、勤労青少年育成関係団体で作っている日本勤労青少年団体協議会で何かやろうということでもあったのですが、1つはモルジブという国に私の所属する団体のかっての青少年運動のリーダーが、国連の職員という形で赴任しており、彼がそこで孤軍奮闘してがんばっている、彼を応援してやろうではないか、というようなことではじまった運動なのです。

モルジブという国は、インドの南に紅茶で有名なセイロン、いまはスリランカという国がありますが、スリランカから南西に650キロ、首都のコロンボから飛行機で1時間半ぐらいのところに散らばっている珊瑚の島なのです。堂々たる独立国でして、人口は約15万人ですが、国連での1票も持っています。イギリスから15年ほど前に独立した国ですが、モンスーンの時期になると島が孤立して餓死状態になるということで、彼がそこに職員として赴任しており、私どもに何かできないだろうかという訴えがあったのです。その訴えに応えたのが、青少年の野外活動ということで10年ほど九州の日南海岸で実施している黒潮キャンプに参加した子供たちの1円玉募金運動だったわけです。初めは、お米を持ち寄って送ったらどうかという子供の発言がありました。

当時、ちょうど米が５００万トンあまっているとか馬や牛の餌にしているという話があって、我々も若干憤慨していたわけですが、そういうところに米を送ったらどうかという子供たちの提案ではじまったわけです。ただし、米は他人のために譲渡できないという、食管法という法律がありまして、それでは１円玉募金運動にしょうということではじまったわけで、幸いにして９３０万円ほど全国からの応援があり、米を８００俵船に積んで、無事に国際的な約束を果した、という経験を持っているわけです。

しかし、こういう小さな１つの体験運動のなかでも、大変学ぶことがありました。我々が１つの活動をやろうというときに、いろいろな法律的な問題がある。米の価格には国際価格と国内価格といった問題もあるわけです。当時、トンあたり国際価格は５万円、国内価格は３０万ぐらいだったわけです。当然、貴重な全国からのお金ですからできるだけ多く送りたいと思っていたのですが、食管法によってトンあたり３０万払わなければいけない。本当は米は日本で余っているのならただでくれてもいいと思ったのですが、実際は３０万円で買わなければいけないのです。そういう問題も条例を若干改正してもらい、そのうえ国際価格で買うような体制ができてきたわけですが、そういった問題があります。日本が困っているのによその国どころではないではないかというような反応もありました。

モルジブという国自身が日本とあまりなじみがないと思われるでしょうが、大変重要なかかわりあいがありまして、日本の血脈というか、石油タンカーを1,５００隻ほど、国の中を通してもらっているわけです。

それから国連でも非常に重い１票を持っている国で、むしろイスラム圏のオピニオンリーダーであるというようなこと、さらに、かつお、まぐろなどを、日本に輸出してくれる国でもあるわけです。

もう１つは、米ソ軍事基地の問題というか、がん島という島があり、ソビエトが常日ごろ使用したいと言っているわけです。そのすぐ南に第七艦隊のガルシアという基地があります。そういうところを日本のタンカーが通っているというような問題もありました。

もう１つ、国連に加盟している人口１００万以下の国が約３０ケ国ぐらいあって、いわゆるミニ国家といいますか、そういう国々が国際的な世論の形成に重要なかかわりをもっているのです。私たちは国際的といいますとどうしても欧米中心主義といいますか、なんとなく明治時代の欧米に対する劣等感も重なりあって、欧米中心になっていく、一方、アジア、アフリカ、中近東というと、何となく軽視しがちである。ましてやミニ国家などというと、大統領がきても、軽視しがちだというようなことがあって、こういうことは日本のサバイバルにとっても大きな問題ではないだろうかと思います。このような国々でも、日本の水産会社が進出しており、勤労青少年が冷凍工場で働いていたり、ジーゼル会社で働いていたりしています。私どもの関連している会社でも、いま５,０００人ほどのタイの研修生を受け入れて、一緒に働いておりますし、合弁会社は次々とできております。突然どこの国に行けという命令で、海外で働いている勤労青少年も非常に多いわけです。どうも国際問題といいます

と、我々とあまり関係がないといいますか、海外旅行程度で終ってしまい国際問題は政治家がやればいいのではないかという感じがするのですけれども、実際には国際的な問題というのは、非常に我々と深いかかわりあいをもっております。そういった意味でも、国際理解教育というものを進めていかないと、私たちの問題にふりかかってくるのではないかという気がしているわけです。

モルジブに関しましては幸い超党派で国会議員の連盟ができ、政府として、米を送ってもらうとか、小学校を5つ建設するとか、今年から我々の提言が実りまして、青年海外協力隊員が5人ほど行って活動を始めてくれました。たまたま、これがモルジブという国だったのですが世界中にいろいろな国があるわけです。昨年3万人で独立したバナナッツ共和国とか、いろいろな国が独立しています。そういう国の国際的な世論というのは、大変重要な問題でありますし、また我々が学んだのは、貧しいから送るということではなく、そういうものの援助をきっかけに人間の交流などもはじまったわけです。そうしますと、どちらが幸せなのかということで、先ほど木村先生からはパキスタンとイギリスの話がありまして「衣食足りて礼節を知る」というようなことで、開発途上国はそれどころではないんだということでした。確かにそうなのですが、争いもない、また年間の所得は当時80ドルですから月に3,000円であり、自然と共に生きているというか、そこにはノイローゼも何もないわけで、魚も必要なだけとったらそれ以上はとらないで、むしろ保護しています。

また、独得の文化も持っています。指導者は大変立派な人達で、いろいろ西洋の知識も持っていますし、同時に自国の文化に対してプライドも持っているという国に、私たちは青少年を連れていき、交流を行ったのですがこの21世紀という時代に確かに物だけでは決められないものがあるんだ、相互の文化交流のなかで、いろいろと私たちが考えていかなければならない問題がたくさんあるんだな、ということを逆に学んだわけです。こういった運動は、単なる外務省とか政治などに任せていただけでは、大きな国民的な世論を引っぱっていくことはできないのではないか。ぶつかっていくという一つの行動のなかから出てくるのではなかろうかと思います。

たとえば、高齢化社会の問題に関しましても若いひとたちが直面するのは年金の負担増大、保険料といったことで給料の半分以上を徴収される時代が、このままだったらやがてはくるだろう。法律の改正、その他の問題があり、私たちの年代がちょうど30年、40年しましたらおそらく若いひとは、あまり負担してくれないというような問題も、今のままでしたら起こるでしょう。

しかし、そのなかで活力の問題といいますか、先ほど有馬先生が達成能力と維持、メンテナンスということが大事であるとおっしゃっておられましたが、それを行う活力、こういうものの1つの行動をどうやって出すかというのが重要な問題ではなかろうかと思います。いろいろな問題が確かに山積してくると思います。一つは情報化時代といいますか、最近第5世代コンピューターというのが出てきておりまして、考えるコンピューターの時代にきています。そういった技術の進歩というものが実際に人間の進歩なのか、また逆にそれがもたらす人間への挑戦というか、人間の精神的な衰退といっ

たこととも関係ないだろうかという問題。しかし、若い世代のなかにそれを押しのける力が生まれてこなければ、サバイバルというのは可能ではないわけで、そういうことが必要な時代だろうと思います。

市川　私は企業のなかで勤労青少年の福祉推進者をおおせつかっております。法の制定された当時から福祉推進者をおおせつかっていますが、それと同時に地区の福祉推進者協議会に参加いたしまして、日ごろ勤労青少年の福祉の問題につきいろいろ活動しております。日ごろ悩んでいることとか、苦心していることを私なりに発表したいと思います。

最初に皆様御承知のとおり、勤労青少年の福祉法が制定されてから早いもので１３年目を迎えるわけです。この間、大変厳しい社会情勢下にありまして、なおかつ中高年の時代を迎える今日に至ったわけですが、国、地方公共団体、事業主そして福祉に携わる皆様方の深い御理解と御協力、御指導によりまして今日に至る間、勤労青少年の福祉の増進も着実な歩みをたどってきたのが現状ではないかと思います。

神奈川県下の勤労青少年の福祉推進者協議会は、同法の制定に伴いまして、昭和４７～４９年までの３年間に各地区ごとに準備会が結成されまして、県下の９地区に時を同じくして産声をあげたわけです。発足当時は高度経済成長期の末期でしたが、新規学卒者を含む若年労働者の採用は、大変難しいものがありまして、県内だけでは若年の労働力を確保できず、その多くを県外の労働力に頼っていたわけです。ですから、企業ではこの貴重な若い労働力の確保とその定着を図るため、寮対策、あるいわ余暇、文化、体育活動、レクリエーション、こうした福祉の充実とそれを推進するための指導者の育成に力をそそいでいたわけです。

協議会もこうした要望に応え、さまざまな活動を現在まで行ってきました。中味については、のちほど時間がありましたら説明していきたいと思います。

その後、日本の経済は昭和４９年以降のオイルショックにはじまりました低経済成長期に入ったわけですが、こうした長びく不況は、現在では鉄工、あるいは化学業界はもとより従来全然不況を知らなかった産業にまで押しよせ、この長期にわたる不況のため企業はより付加価値の高い生産性の追求を求めて合理化、技術の革新を図りまして、結果として新規学卒者の採用を抑制するというのが現状です。これを数で見ますと、昭和４９年に神奈川県下の勤労青少年は５４万９,０００人おりましたけれども、５年後の昭和５４年にはその数が３７万１,０００人と大幅に減っているのが実状です。

私が勤務する工場でも、新規学卒者の採用中止に伴い、ちょうど今から１０年前の昭和４８年当時、工場の平均年齢が２９.５歳であったものが、今年の４月１日現在の統計では、男子３９.３歳、女子４０.４歳で、１１月現在では平均年齢が４０.７歳ぐらいになっていると思います。

こうした新規学卒者の採用の抑制により、企業の労働者の年令構成は、いま申し上げましたように中高年齢者の増加という形で表われ、企業における労務管理の面は、減少する勤労青少年の対策より

も、むしろ当面する中高年齢者の対策をいかに進めていくかが深刻な課題となっております。

こうした背景をふまえ、協議会も時代のニーズに応えるべく活動計画の見直しを計り、より多くの方の行事への参加を呼びかけて実践しておりますけれども、残念ながら参加者が少ないのが現状でございます。

また県行政のレベルにおきましても、より充実した勤労青少年の福祉活動を推進すべく、年1回各地の地区の代表者会長1名、副会長2名の3名を召集して県行政の理解、あるいは現状の問題点、意見、要望等、そうした意見の交換の場を設け、より充実した勤労青少年の福祉活動を行っていこうと努力しているのが現状でございます。

2番目に社員の高齢化ということについて、若干お話したいと思いますが、先ほど述べましたように、企業をとりまく環境は大変厳しく鉄鋼業界はもとより化学業界にまで不況の手がのびているわけですが、一方では世界に類のないスピードで進んでいる高齢化社会の到来に伴う労働力の高齢化対策が企業で早急に取組まなければならない課題になっているわけです。この問題がうまくいきませんと企業にとって死活問題ということにもなるわけですけれども、そうした問題が今いちばん重要な課題となっております。

昨年神奈川県が行いました調査によりますと、県下における人口の構成は概ね32～38歳に集中している結果が出ております。このままの年齢で推移しますと昭和70年ごろには、県下の人口構成は45～51歳に集中するということになりますので、まさしく中高年の県といっては変ですがそのような状態におかれるようになります。

とくに中小企業では大企業に比べて労働力の高齢化がより早く進んでいるのが現状です。これは先ほど、先生方からもお話がありましたけれども日本が戦後の混乱期から立直り、昭和30年代末から40年代の高度経済成長期に慢性的に労働者が不足しました。とくに新規学卒者は金の卵と言われ、就職先は当然ながら労働条件の整備された大企業に集中したため、労働環境の不整備だった中小企業では労働力の補充は比較的採用の容易であった中高年齢者層の中途採用に頼らざるを得なかったわけです。そうした経過がありまして、今日、中小企業の高齢化といいますのは非常に早い速度で進んでいるのが実態でございます。また、企業が急速に伸びる過程にはより高い生産性の追求をくり返し、生産行程のなかに入りこむことによってなしえたわけです。そして、その後、長びく不況をのりこえるため産業界はより合理性を追求し、今日のマイクロエレクトロニクスを中心とする技術の革新へと進み、中高年はもとより勤労青少年のとりまく労働環境も急速に変化しております。最近ではこうした産業用ロボットによります労働災害も深刻な問題になっているのが現状でございます。

こうした作業環境の変化といいますのは、実は若年労働者は比較的早く対応できるのですが、むしろ中高年労働者の場合にはなかなかそうした作業環境に対応できないという実態もございます。ですから、ある熟年の労働者の話によりますと急速に変化する技術の革新が更に進んだ場合に果して仕事

についていかれるかという率直な意見も出ているのが現状です。

今後更に多くの中高年を抱えていくなかでその対策は企業の規模、年令構成、性別、職種等によって違ってくると思いますけれども、こうした方々の再教育の徹底を図りまして健康で働きがい、生きがいのある職場を作ることが何より望まれているわけでございます。

もう一つは、現在の若者ということなのですが、私も勤労青少年の福祉推進者をおおせつかったときは、ちょうど２５歳でございましたので、自分が勤労青少年か推進者かわからなかったような時代でした。生まれましたのが終戦後でしたので一番物のない時代に育ちました。今の若い方を見ていますと、物を大切にしないという面も感じますけれども、逆に非常にバイタリティーのあるすばらしい能力を持っているということも感じます。

本日ここに、御来席の皆様もそうだったと思うのですが私たちの子供のころは毎日野原をかけまわり、友だちと喧嘩もし、そうした日常生活の遊びのなかからお互いに協力しあったり、譲りあったり、我慢するということが自然に身についたわけです。また、兄弟姉妹が４、５人いる家庭もそれ程珍しくはなく、当時はまだ経済的にゆとりのない時代でしたからどこの家庭でも家計は大変苦しいわけです。ですから、子供たちは能力があるなしにかかわらず誰もが高等学校に行けるという状態ではなかったわけです。しかし、現在の家庭をみますと、殆んどの家庭が子供は１人か２人が多いわけです。そうなりますと、親御さんの子供にかける期待は大変大きいものがあり子供が何か欲しいといえば、何でも与えるような環境が出てくるわけです。子供たちは大人になるまで何不自由なく育ったわけですから知らず知らず我慢することがなくなってきます。小学校の高学年になりますと将来のためにと塾通いに精を出して、近所の子供たちと遊んだりスポーツをするというようなことがなくなり、親子で過ごす時間が非常に長くなりますのでどうしても人間関係がかたよった形で成長してしまいます。そうした若者たちが一人で社会に巣立つ時期になりますと、非常に人間関係で苦労するのが現実ではないかと思います。

現在、上級学校への進学率は、高校で９４.０％になっております。これは言いかえれば特別な事情がないかぎり、殆んどの方は高校に進学しているわけです。また、大学の進学率は男子３６.１％、女子１２.２％です。こうした高等教育を受けました若い方たちの理想とする職業はアンケートによると自分の能力が十分発揮できる、高い収入が得られる、仕事が楽しくできるなどとなっているわけです。このアンケートの結果でもわかりますように、現代の若い方たちはもちろん自分の将来の仕事に大きな夢を託しておりますけれども、また仕事のなかに恰好よさを求めているわけです。しかし、現実は一体どうかということになりますと、もっと厳しい面があると思うのです。高等教育を受けた方たちが大量に卒業して就職を希望するわけですがこれを受入れる企業の側にとりますと、大変長びく不況でそれによる減量経営のために就職希望者を全員採用する受皿がないわけですから、学校は出たものの就職はできないといった現象が起こり、まして自分の理想とする職業に就ける方は逆にごく限られ

てくるわけです。入社してから与えられた仕事も理想とは大きくかけ離れた面がたくさんありますから、そこに大きなギャップが生じてくるわけです。ですが、こうしたギャップといいますのは今の方に限らず私たちの若いときも同じようなギャップは、大なり小なりあったわけです。一番大切なことは、現実におかれている立場や仕事の内容などをはっきりと認識させ、自分の仕事のなかから可能性を追求するチャレンジすることで、このことによって立派な社会人に成長していくことができるのではないかと思います。

余談になりますが、ある会社の人事担当者とお話をする機会がありましてその方がこんな話をしていたのです。会社の就職試験に母親が同伴しており、個人面接、テストが一通り終った後にいろいろと話をしていたそうです。そのなかで、母親が子供に対してもしこの会社がいやだったら、べつに辞めてもいいんだよというような話をしていたということですが、これはまさしく親離れ、子離れしない現代の若者の一面を見るような思いがいたしました。

最後に、これからの福祉活動ということでお話したかったのですが時間がきましたので、のちほどお話したいと思います。

○加藤　今朝テレビの『おしん』を見ていましたら、５人めの子供ができるという場面で、おしんが何を言っているかと思ったら「全員、大学にやるぞ」などと言っているのです。あれは昭和の初めのころの日本ではなくて今の高学歴時代の台詞のような感じがいたしました。

次に林田先生にお願いします。

林田　今日は、おそらく福祉員の立場ということで、ここの席に出されたものと私は思っております。

本日のタイトルはとても大きなタイトルでございましてこれを与えられた７分で話せというのは至難の技でございまして、私なりの考え方をまとめてみたいと考えます。

国際化ということになりますと、国があればその国には歴史がある。とくに我国のように島国ですと独特の社会慣行なり歴史的な背景における慣行から、文化が自然と生まれてきてこれは不自然なものではない。とくに徳川時代は閉鎖的でしたし、明治維新になりまして初めて国際化の第一歩を踏んだといっても過言ではないと思います。その時代にも、やはり下級武士、明治維新の功労者かもしれませんがこのひとたちが外国の先進国から文化、新しい経済システムとか諸々のものを学んできたのです。昭和２０年に敗戦したわけですが、実際に外国との交流というのはここから始まってきていると思います。私も終戦直後国民学校の生徒でしたが、昭和２３年度に新教育法が制定されてからおそらく我々の世代が初めての体験者ではなかったかと思います。その後、中学で英語を習い、高校、大学と英語をならったわけですが、私は英語をひとつも話せません。外国にも行った経験がありますが、外国人と接触する機会はとても少なかったのです。これも私だけではなく勉強したもののそれが実際に行動に移せない日本の１つの特徴ではなかろうかと思います。

過日の発表資料によりますと、最近の海外ブームは２０代のひとが圧倒的に多くそれも未婚の女性が多いということです。私ども中高年齢の人間はあまり外国を体験していない。そのギャップというものは、組織のなかでも大きな問題として出てきていることはたしかだと思います。

今後、若い人は私ども以上に外国に行く機会もあると思いますが、せっかく外国に行ったなら外国人と接触し、話せない英語であれ努力することによって外国の文化なり、その国の社会的慣行というものを学びとってきていただきたいと考えます。８５年は国際青年の年でもありますので、若者がそういう機会を有効に利用していただければ、私は大いに国際年を転機としてスローガンどおりにいくのではないかと考えております。

若者は我々以上に外国に行く機会を持っているわけですが、企業のなかにおいても戦後の新教育法を受けた人と我々戦前の体験をした人とのゼネレーションギャップというものが多々あります。これは人口構造からいっても高齢化社会を迎えていくピラミッド型からビヤ樽型、そして円柱型に変っていくということから当然のことでしょう。教育なり家庭の環境なりによって、中高年労働者と若い労働者のものごとの考え方、対応の仕方が大いに変ってきています。例えば、中高年齢者を再教育するといいましても私を含めてなかなか記憶がもどるわけでもありませんし、新しい教育を導入するほどの感覚を持ちあわせていない。ところが、今の若い人達はそれに対応する能力というものが訓練を行うことによってできる。例えば、電子工学ということになりますと、これが職業訓練を行いましても企業のなかで中高年の労働者には向いていない。ところが、いろいろのＮＣなどのなかに電子工学が入ってくる。ここにトヨタの方が出席していらっしゃるかどうかわかりませんが、トヨタの車でも日産でも同じだと思いますが高速道路で故障し、整備工がチェックしたけれども３時間たってもわからなかったというくらいに、あらゆるところに電子工学が入ってきている。これは一つの例かもしれませんが、職場の中で一つの従業員教育を行うにしても中高年齢者の教育と若い労働者の教育はいろいろ違うところがあります。そういう状況で、どのようにして企業が中高年と若者との調和を保っていくか。これはマネージメントといたしまして絶えず問題になっているところでもあり、今後より一層大きな問題になると思います。

ただ、中高年齢者は若い時分もありました。技術的に習得したもの、そして日本みたいに終身雇用、年功序列型賃金体系の労使関係をとっているところですと、その企業に長く働いていただけではなく、その企業において働く人が成長する過程もよく知っているわけです。そうしますと、若いものとの接触、また勉強の機会に対してはお互いが素直になり、打ち込んでいかなければ企業の人事部門に混乱が起きてくると考えます。

私はよく嫁と姑の話をします。どちらが歩みよるべきであるかといいますと時代の背景は違いましても、経験を積み重ねた年上の人が歩みよるべきであろう。歩みよった上で問題解決をすべきではなかろうかと考えております。

今度は若者の立場から見ますと諸外国から比べますとリーダー性というのがない。若者の個性というのがないのです。ですから、例えば諸外国との調査比較をいたしますとボランティア活動というものが我国では一部の学生は敬老の日に行って老人を喜ばせるという活動も行っているようですが、全般的に見ますとボランティア活動というものが少ないということは若者の意識のなかにそういう問題というものが欠けるところがあるのではないかと私は考えます。

私なりの若者感を分析してみますと、人間接触への飢えと警戒心があるのではないかと思います。

２つ目として、皮かむりあるいは閉鎖的傾向が最近の若者には見られる。３つ目としては孤独ぐせがついている。これは若者の自動車志向にそれが言えるのではないかと思います。また美的世界への憧れとのめりこみもあると思います。これは職業観また人生観のなかでもそういう問題があります。これはガラスのなかに入った人工的に作られた花と同じで壊われやすいという感じがあります。最後としまして社会への無関心ないしは反社会への信条、これは私ども企業人としましてはとても危惧するところです。日本の企業に働く労働者というのは企業に対する帰属感が日本的労使関係の骨子であり、また日本経済をここまで復興させたといっても私は過言ではないと思います。こういうものが若い者の間で欠けてくるということは将来を危惧するものでございます。

加藤　ありがとうございました。林田先生は英語の話をなさいましたけれども、日本の学校英語教育というのは明治以来ずっと読み書き中心というか、訳読中心でして、戦後になってから会話などというのが入ってまいりました。文部省も大変心配しているわけですが、なにしろいくら力を入れようと思っても英語の先生のほうが話せないという方が多勢いらっしゃるので無理で、少なくとも中学校以上には１人ずつ外国人というか英語を話せる国民の教師をおこうではないかという遠大な計画がありますが、これができるまでは２０年くらいかかるなどという話を聞きました。最近高等学校でだいぶ英語の先生が配置されるようになりましたが、外国人から習わないとなかなか無理で先生のほうが話す能力がないという現状なのです。私も明治以来の伝統に従って読むほうはできますけれども、話すほうになりますと外国にでかける前には必ず誰か先生について勉強してそれから出かけるという大変お金のかかることをしております。

第一ラウンドの最後ですが桐畑先生にお願いします。

桐畑　全国の約５５０の勤労青少年ホームの館長さんを代表いたしまして意見を述べていきたいと思います。果して、皆さん方のお役に立つような内容であるかどうか、また各先生方と重複するところが出てこようかと思いますが、御容赦いただきたいと思います。

国際化の進展は世界各国が政治、経済、文化と交流が高まり世界が小さく狭くなったというのが近代語となっております。これは新聞等で私が読んだ言葉ですが世界の流行がすぐやってきます。また小さな工場からも世界に出ていく製品も少なくありません。これは誰が意図したものでもなく自然のすう勢、気運であろうと思います。これに順応するのが当然であります。広く世界各国における勤労

青少年福祉の実態を知るべく交流を促進し、その実態を知るべく機会を持ち、また理解を深めて広めるべきであります。

問題はどのようにして勤労青少年がかかわりを持ち、順応して対応させていくべきかであります。私はまず国際的な感覚を身につけていく必要があると思います。国の外交と違いまして市民対市民、若者対若者、対方自治体対地方自治体等の政治ぬきの交流を深め世界に対する目を大きく開かせていくべきだと考えるものでございます。

私の県は滋賀県でございますが、彦根市勤労青少年ホームでは、たしか本年で2回目であろうと思いますが海外研修を行っております。ホームにすばらしい指導員がおります。そして、若者たちで作っております利用者の会がすばらしい組織でりっぱなリーダーがおります。「勤労青少年の翼」と称しまして東南アジア諸国の現地青年と唄や踊りを通じまして交流をして本年も30余名が参加しまして9月に帰国しているわけでございます。

とくに、東南アジア関係につきましては本年6月の全国のホーム協議会の10周年記念の特別記念講演会で江橋先生が、最近、東南アジアの国々で日本の勤労青少年ホームが注目をされているということを言われておりました。このように国際的にも注目されているなかで、10月下旬だと思いますが彦根市勤労青少年ホームへ現地青年が訪れまして友情を確認し、可能であれば友好関係を結びたいとの意向であると私は聞き及んでおります。これと若者自らが企画し自己負担で海外の若人と接し、実態を知り、自国での生き方等をふり返り見直そうとする姿は実にすばらしく指導実践を担当する関係者に敬服しているところでございます。私は、これを少なくとも府県単位の勤労青少年ホーム連絡協議会で実行してはどうかと考えているものです。

他方、今日ご出席の皆さん方の自治体でも、おそらく世界各国各都市と姉妹提携を結び、いろいろな形で交流がなされているものと思います。おそらく勤労青少年の使節団員としての特別派遣枠のない自治体が多いのではないかと推察いたしております。滋賀県もアメリカのミシガン洲、ブラジルのリオグランデドスール洲、中国の江南省と友好関係を結んでおります。そして、また滋賀県の市町村単位でも世界各国18都市と姉妹提携を結んで使節団員の派遣、また団員の受入等、交流を深めておられるところですが悲しいかな勤労青少年の特別の派遣の枠などはございません。

そこで、私は海外研修で得るであろう数多くの体験や成果を、即期待するのではなく、近い将来を担う有為な青年層を培養させるという大きな観点にたって若い力を伸ばし、社会全体の活性化を図り、将来を託そうとする気があるのならば1人や2人ぐらいの勤労青少年を優先的に派遣する特別枠の措置を講ずべき時期でもあり、また施策があってもよいのではないかと考えるものです。

1985年、昭和60年ですが、国際青年の年に向けて関係者が積極的に取組んで、一歩一歩でも実現していくならば数多くの若人が海外での貴重な体験を積み、すばらしいリーダーとして成育し有為な青年層が蓄積でき得るものと確信するものです。

次に高齢化社会とのかかわりですが、重要なテーマでございましてとりまとめに苦慮いたしております。ともあれ、我国の今日の繁栄と世界の基礎を固めた人達が現在老境に入っているわけです。戦中、戦後における当時の青少年勤労者の労を多とする感謝を現在の勤労青少年が認識すべきときでもあります。元来、若者は老人の持うるものを社会に還元する媒介をなす役割がございます。核家族化が進み、若者と老人との日常的なつながりが乏しくなってきております。こうしたなかで体験の語り継ぎや知恵の継承ができないのでいたわりの情の喪失や敬う気持が欠落してきているのが現実の問題です。

私はこのような状況のなかで雇用延長、生活の保障という方策も重要なことだろうと思いますが、いかにして現代青年の特徴と言われております自主性がなく、打算的で依頼心の強い若者を教育、文化、スポーツ等を通じ暖かい心と血の通う唯心的意識への転換策も重要な課題ではなかろうかと思います。職場や企業と地域社会との密接なかかわりあいを自覚しつつ、各世代間の連帯と共通の理解を求め身近なところの肉親や近隣の老人と接する機会を設定するなど、ボランティア活動を活発化させて、物質万能となりがちな勤労意識のあり方と考え併せ、いわゆる物から心への見直しの時期ではなかろうかと思います。

最後に好むと好まざるにかかわらず次代の老人であることを自覚すべきで勇気をもって今までと違った発想で対応の転換を図り、良き解決に向いたいと思うものでございます。

加藤　ありがとうございました。先生は勤労青少年の代表というか有志を特別枠を設けて海外で学ぶチャンスが与えられないかというお話をなさいましたけれども、加藤日出夫さんの若い根っ子の会では、毎年かどうかは知りませんが、若者達がお金を持ち寄って自分達で船を一隻借りてフィリピンに行ったり、東南アジアに行ったりしているわけですが５５０もホームがありますので若者たちが２年後、３年後という計画を立ててお金を貯めて、それを持ち寄ってきてきちんと組織を作っておけば、毎年一隻ずつぐらい日本丸あたりを借りて近いところだったら行けるのではないか、お隣りの中国等でも受入れてくれると思います。館長協議会などがございますが、誰かその熱意があれば必ず実っていくと私は思います。

ひとわたり講師の発言を終ったわけですが、何か補足意見がありましたら有馬先生のほうから順に発言なさっていただきたいと思います。

有馬　今、２人の先生からボランティアのお話が出ましたので、そのことについて一言話させていただきたいと思います。

私今月の初め１１月３日ですが、全国１１ヶ所で走りました身障者専用列車「ひまわり号」の１つに同乗取材をしてまいりました。そのときに感じたのですが、私が取材した列車には身障者が１５０人、大体１人について３人のボランティアということでざっと５００人くらいのボランティアがいました。ボランティアのほとんどは２１、２歳の若者たちで学生あり、勤労青少年ありということでした。身障者側のほうは若い子供たちもあれば今年大変目立っていたのは車椅子で高齢者の方です。脳

出血、その他の後遺症で現在身障の状態になっていらっしゃるという方々が多かったのです。

その若者たちとボランティアを受ける方々との間にどういう交流があったのか。なぜ、若者たちはボランティアに参加したのかが私には非常に興味のあるテーマでした。若者たちに参加した理由を聞きましたら、非常に多い答えは国鉄労働者の方が多いのですが、職場の仲間に声をかけられたというのです。それも何かの際だったグループなどというのではなくて、日ごろプロ野球の話か、何かをしているような仲間のうちで話をしているなかで「自分は今こういうことをやっているのだけれども、人手がなくて困っているんだよな」などという話が出て「おまえ、暇だったら、ちょっと来いよ」みたいな話で呼ばれて「それなら、ちょっと行こうか」というので行ってみてだんだん深入りをしていったというようなケースが非常に多いということがわかったわけです。だから、若者同士の誘いあいといいますか、若者同士のすごく気軽な声のかけ方というのが、ひとつボランティアの輪を広げていくというのに効果的なのかなという感じを持ったのです。もちろん、声をかけても1回ですぐいやだとやめるひともいます。しかし、列車で身障者を連れて目的地までいく（私の場合は上野から那須高原に行ったのですが）これは大変なことです。そのときだけ行って車椅子を押せばいいという話ではなくて、そこに至るまでに障害者との間にコミュニケーションができなければいけないわけで2ヶ月間ぐらいこの障害者の家に通ったり、どこかで会ったりしてなんとなく心のつながりを作っていって、さあ連れていっても大丈夫という状態を作るわけです。そういうなかで、もちろん脱落する人は非常に多かったそうですが結構沢山の人が残っていました。それで「今、どういう気分？」と聞きましたら「なにか、わりかしいい気持なんだよ」というような答え方をするわけです。よく聞いてみますと、自分がとても正しいことをしているとか偉いことをしているとか言われるとしらけてしまう。しかし、自分の気持としては誰かの役にたって、その人が自分なしでは生きていけない、行動ができないということで大変頼りにされているということに対して、頼りにされている側が自分の存在を認められたということで、すごくうれしいわけです。そういうことを言うのです。彼等は、それを「わりかしいい気分なんだよ」というような言い方で表現します。そのへんに自分の確かな存在感、機械の部品の1つではないという存在感を覚え、それが活動を支えてきたという感じを受けたのです。この若者たちのボランティアは、律儀な、しかしどこか押しつけがましいボランティアという感じではなく、もっとあっけらかんとしたボランティアなのですが、その人達の間の交流を見ておりますとこれがまた面白いんです。車椅子で行けないところは障害児を背負って後ろからほかのボランティアが支えたりしていきます。そうすると、上に背負われている子供が「なんでここまで車椅子入れないんだよ」というようなことをいいます。背負っている青年は「ここは無理じゃないか、下が石ころじゃないか」などと言う。「押してここまで入ってくれよ」というと「そんな無理なことを言うな、おまえそれならやってみろよ」というようなことを障害者の子供に向かって若者ですから平気で怒ったりしているわけです。すると障害者の子供は「無理を承知でいってんだ。へへへ。」青年は「おまえは、重いん

だぞ。オレ、あげちゃいそう」というようなことを言いあいながら行っている。そのへんの交流は「あなたはとてもいい子ですから、もうちょっと我慢していらっしゃいね」というような大人の言い方とは違った通い方がある。そのへんのところに新しいボランティアの芽があるのではないかということを感じたわけでございます。1つの体験を話させていただきました。

堀添　今日、参加されている方のなかにもいろいろと協力の要請があると思うのですけれども、来年からアセアンの青年が約７５０名日本を訪れるわけです。これは約１ケ月ぐらいですが5ケ年計画ですから3,７５０名ということになるわけです。今年総理がアセアンを回られ、物の援助だけでなく青年の交流をやろうということで提案されて、さっそくその準備にとりかかっているわけです。勤労青年だけではなくて学生、教員、農村青年という形できますので、勤労青少年は、都市勤労青年約１５０名、５ケ国約３０名ずつということで勤労青少年ホームとか福祉推進者の方とか企業側とかいろいろ御協力をお願いすることがあると思うのです。まだ、予算が国会を通っていませんが約1年で１３億円ぐらいを予定しているわけです。

別に総理府の東南アジア青年の船というのがありますが、これは4億円ぐらいの予算でアジアの青年のリーダー約１００名が、ついこの間まで船に乗ってきておりました。

それから国際協力の予算というのは労働省のなかでも、ずいぶん急成長していると思うのです。ここで考えたのですが国際化というのは自分達にとって一体何なのかということです。具体的には例えば下田会議においてシュルツ国務長官が日本は立派になった、パキスタンの難民に対しては９００万ドルを援助したではないか、おまえのところは世界で一番だよ、とほめてくれているわけです。日本とアメリカは国民所得が世界で３５％だからひとつ頑張ろうではないかということでありますし、我々の税金のなかで占める国際的な援助とかそういうものが増えていくだろうと思うのです。これはトップ主導型と言いますか、日本は原料を買って海外にいろいろな品物を買ってもらっているわけです。建前と本音ではありませんけれども、政府が対外協力していかないと国際的に孤立するんだ、私たちの懐もある程度さかなくてはいけないという問題が現実としてはあるだろうと思います。

トップ・トウ・トップの交流からピープル・トウ・ピープルの交流へといいますか、我々が納得して交流を行っていかなければいけないという時代に入っていかざるを得ないのではないかと思います。そういった意味で単に政府の援助が増えたとかヒューマニティーの問題とかということだけでなくて、我々が納得して、予算とかいろいろな取り組みに対して積極的にいいものはいい、悪いものは悪いといっていかなくてはいけないのではないかと思います。

例えば、青少年の青年海外派遣などがずいぶん前からありましたが、単なる大名旅行的なものにもいまだに続いて予算が使われている。それをもっと効果的にする方法はないものだろうか。単に青年を海外に送れば国際感覚がついて立派に国際理解が深まるだろうという認識はもう一度再検討し予算を効果的に生かすことが必要であろう。また民間においても、民間団体が大いに力を発揮し、個々で

はできない大きな問題に取り組むというようなことをして国際化というよりも自分の身近な問題として考えていかなくてはいけない時代ではないかと思います。基本的には単なる西洋的な物指しとかそういう時代ではなくて、私たちがいかにこういう時代のなかで活力を失わないでやっていくか、コンピュータにうち勝つにはどうしたらいいか。人間の本来持っている直感力とかそういうような教育を行うにはどうしたらいいかという問題が具体的には例えば勤労青少年の世話役、福祉推進者とかリーダーの一つの課題ではなかろうかという気がいたします。

市川　これからの福祉推進活動ということなのですけれども、ご承知どおり福祉推進者を選任する対象事業所といいますのは、省令により勤労青少年２０人以上雇っている事業所ということになっております。こうした事業所は言いかえれば大企業ないし優良中堅企業というところですので、福祉活動、施設とも十分整っていると思うのです。

一番問題になりますのは、私どもでもそうなのですがなかなか中小の方の参加が得られないということで今後はそうした中小企業のなかに福祉推進者の方をどう設置していくかということが、一つの大きな問題になってくると思うのです。

２年ほど前になると思いますけれども労働省から第３次勤労青少年の福祉対策の基本方針の策定というものが出されました。神奈川県においては従来の省令によります福祉推進者の設置は一定のレベルに達したということで今後は、勤労青少年が１人でもいれば福祉推進者を設置していくんだということで各事業所にお願いをしているのが現状でございます。

ですけれども、福祉推進者の設置そのものが事業主の自由裁量による点が非常に多いものですから現実はなかなか設置ができていないということで本日ここにお集まりの、例えば会館の館長さんあろいは青少年ホームの方もそうだと思うのですけれども、いろいろな活動をやっても若者の方が非常に参加が少なくてむしろ半分以上は勤労青少年ではない方が参加しているのが実態だというわけです。ある中小企業の若い方にお話を聞きますと、我々はそうしたものに参加したいのだけれども、なかなか合理化のあおりをくって時間がとれなくて参加できないんだというのが率直な意見です。そうした意味からしまして今後はそうした中小企業の福祉活動をいかに進めていくかということが、全体レベルの福祉活動の向上につながるのではないかと思います。

もう一つは、日本人の寿命も８０歳ぐらいになるということで、そのうち企業で働く時間あるいは期間を考えますと大体人生の半分を占めているわけです。１日でみれば、寝る時間を除いて殆んどの時間は会社で過しているわけですから、そういったことを考えますと定年を６０歳としますと６０歳まで健康で働きがい、生きがいのある職場作りをすることが私は一番の福祉ではないかと思います。そのためには行政と企業側が同一のレベルで物事を認識しあい、行政でやらなければいけないことは行政でやり日常の福祉活動というのは企業の責任においてやっていくことが、大切ではないかと思います。そうした意味からしましても、各方面にできるだけ多くの勤労青少年福祉推進者を設置されま

して、地区の協議会に参加してお互いに日ごろの悩みあるいは問題等を出しあって、そのなかから解決していくことがこれからの大切な面ではないかということを、日ごろの活動のなかから痛感している次第でございます。

林田　最近の若者は我々職場で接触していまして、例えば職場上での企画参画、また職場外での余暇活動への企画、参画等についてみますと、我々の頭は硬直化していることを感じます。私も文献等は人一倍読んでいるつもりでおります。しかしながら、いろいろ若者の意見を聞きますと、我々にはない発想が出てくるのです。組織のなかでの年齢間の調和というものにその発想を生かすことが大切ではなかろうか。またそれを導入する一つの姿勢作りが我々の今後の使命ではなかろうかと考えております。そのためには責任のあるリーダーを養成していくことが絶対に必要ではなかろうかと思うものです。先ほど有馬先生から心強いケース・スタディを発表していただきまして有難く感じたのですが、日本の勤労青少年のボランティア活動は、調査結果からみると非常に少ない。この点は国際化が進んでいる中で、私どもの責任でもありますし、若者のボランティアの精神を涵養するための一つの動機付を何らかの形でやってあげなければいけないのではないかと考えております。

桐畑　私は今日のシンポジウムの資料の２０ページ、２２ページに基づきまして話をさせていただいたのですが、私は青少年国際交流関係団体とは角度をかえて地方公共団体等の立場から意見を述べたわけですが、滋賀県だけでも大体世界２１の都市と友好関係を結んでおり全国に行きますとすごい数になると私は思うのです。たまたま交流関係は２年に１回、３年に１回の派遣であろうかと思いますが、もう少し積極的に進めることが必要ではないかと思います。

諸外国からの受入れは、更に少なくなっています。また、今後受け入れた場合積極的にホームでも交流をするという姿勢も必要であろうと思います。

高齢化の問題につきましては私は唯物的なものから唯心的なもの、心を重視すべきと申しましたが、資料にもありますとおり、企業においても、高齢化社会の進行に対する施策として中高年齢者と勤労青少年との意思の疎通を図る。これは、このことであろうと思いますが４７.６％が行っています。ますます高齢化社会に向っていく中で、この対策に力を入れていくべきであると思います。

加藤　これで、前半の講師の意見発表を終りまして、休憩の後、皆様との意見の交流を図りたいと思います。

（休　憩）

＜全体討議＞

加藤（司会）　それではシンポジウムを再開いたします。

質疑討論の時間に移りたいと思います。

渋谷　（兵庫県三木市勤労青少年ホーム館長）　今日のテーマについて一言私の希望を申し上げたいのです。と申しますのは、国際化は一応わかります。高齢化となりますとシンポジウムの先生方に失礼ですが、１９２０代にお生まれの方々がおらないということです。高齢化というのは、自然にできたものではなく当然きたるべきものでありまして、加藤先生がたまたま６０歳になられたということですがこのシンポジウムの先生方に１人でも１９２０年代に生まれた方がおられたら、もう少しこの問題について真剣なお答えがあったと思います。それがないのがちょっと残念だと思います。

我々勤労青少年ホームでは、１５～２５歳までが対象になっておりますけれども、その青少年も一度に２５歳になったのではないのです。私たち１９２０年生まれと共に２５年間一緒にいて今日２５歳になったと思うのです。そうしますと、その間のコミュニケーションというものは必然的にもの心がついた５歳ぐらいから当然あったと思うのです。そういう過程があって我々は初めて年寄りと青少年とのかかわり合いがあったと思うのです。そういうものが、このお話のなかで一言も触れておられなかったということは、ちょっと残念に思います。と申しますのは、私も子供が３人おり、一番上の子供は３７歳になっておりますけれども、３７年間というものは親子としてのコミュニケーションがあったわけです。そうしますと、今日演壇におられます先生方もそのお年になるまで、おそらく周囲におられた勤労青少年についてはその年になるまで何年かのコミュニケーションがあったと思うのです。そういうなかでのお話がもう少し具体的に私は触れてほしかったと思うのです。

国際化ですが、私なりに考えました。私は１９２０年に生まれまして戦前戦後、戦中にも抑留者としてソ連に行きました。

そのときに感じたのは日本人ぐらい閉鎖的な国民はないということです。それがいちばん国際化に遅れていく原因ではないかと思います。私は捕虜として国籍も人権も何も認められないでソ連に３年おりましたけれども、ソ連の国民は捕虜だということは全然忘れて我々を労働者として同じ人間として取扱ってくれました。国際化といっていますが、現在の日本で果してそういう立場になった外国の人々を快く受入れるだけの世相があるでしょうか。その指導はどこでしなければいけないか、ということも大きな問題ではないかと思います。

それと国際化といって海外へ青少年を送り出されますが、行かれる青少年は幸福です。国外に出ていって第一線に立つ人だけを対象とした国際化ではなく国内における国際化ということについて、もっと行政なり、また我々指導者が指導していく責任があるのではないかと思います。

加藤　１９２０年生まれというと大正９年生まれで大正一桁ですが、私は大正二桁です。私から見たら若い方ばかりなので、あるいはお気にそわなかったかもしれません。閉鎖的な国民ということで

捕虜のお話をなさいましたけれども、日本も例えば、日露戦争のあとのロシア人の捕虜あるいは第一次大戦のときのドイツ人の捕虜に対しては大変あたたかく人間的に接触しましたけれども、大東亜戦争における捕虜に対しては大変冷い目でみて捕虜を虐待したのです。これは我々の人間性は大変あたたかいものだと思いますけれども、軍国主義の時代のなかで我々の人間性がゆがめられて外国人に接したのではないか。不本意ながら捕虜を虐待したのではないかと思っていますが、いかがでしょうか。

渋谷　加藤先生の御答弁はよくわかるのですが、今私が勤労青少年ホームの館長として若いひとを預っていて、一番がっかりすることは、自分にとって必要ないことは聞かないんだという態度です。私たち年寄りがいろいろ指導しますと、その中の必要なことは聞いてやる、だけど自分に必要のないことは聞かないんだということを彼等は言うわけです。私たちの時代は、先輩なり、年上の方がおっしゃったことは最後まで全部聞いて自分達が咀しゃくし、解釈し、消化していったのです。今の人は最初から、これは聞く、これは聞かないと選別して対処してくるのです。そういうものの考え方がどこから今の青少年に出てきたかということを私は危惧するわけです。

もうひとつ、レジャー産業というものが非常に若い人の心をむしばんでいるということです。レジャー産業に対して国も地方自治体もいっこうに対策を立ててないということなのです。有害のレジャー産業も多分にあると思います。お金さえ持っていけばいつでも大手を広げて受入れてくれます。それを阻止する方法がないのです。青少年はレジャー産業に対しては何も考えないで、体と金を持っていけば十分満足してくるということです。どうして行政等の力によってそれを規制できないかと思います。全部規制してしまったら若いひとの喜びがなくなる、また、取捨選択をすることを覚えることも必要かもわかりませんが、若い人が果して現在のような危険なレジャー産業のなかに入っていって、その結果はどうなるかということを私は非常に危惧するわけです。できましたら有馬先生に今まで沢山そういうものを見てこられた見地からいいアドバイスがあったらいただきたいと思います。

有馬　只今の１９２０年生まれの館長さんがおっしゃったことは私は御指摘のとおりだと伺っておりました。今の若い人は確かに聞きたいことは聞くけれども聞きたくないことは聞かないと、初めからはっきりわけて考えるというような傾向があると私も思います。ただ、これはその形が極端になってきているのであって、私どもにも多少そういう傾向があるのではないか。「忠言は耳に逆らえり、良薬は口に苦し」というようなことを言いますけれどもそういう傾向もあって、人間のあまり好ましくない部分が拡大されている、それは先ほど御指摘のあったように、それまで育てられた家庭のなかに、そういう芽を育てる要因があったのではないかと感じております。

只今のレジャー産業のことですが、私自身も評判の悪いマスコミのテレビという仕事に携っている人間の一人でして、青少年の問題の集りに出させていただきますと、いつもお叱りをいただきまして誠に居心地の悪い思いをすることが多いのです。本当に只今おっしゃいましたように、今、ちょっと行きすぎではないかと思われるようなものが手を変え品を変えて、とくにセックス産業と言われるよ

うなものに出てきすぎていると思います。では、取締まればいいかというと職業の自由、表現の自由というような問題との関係で難しいことがあるようでして、ただ、それをあまりにもてはやさないようにする責任がマスコミにはあるということは感じております。只今おっしゃいましたようにそれ以外のものに目を向けさせていく方法を、私たちはもう少し開発すべきではないかと思います。私はかねがね若い人から聞いているのですが、例えば若者というのは常に音楽が好きで音に関しましては我々と全然違った世界を作っているわけです。いろいろなことをやりたいのだそうですが、あれはものすごく騒音の部分がありまして、今東京でいちばん困っているのは音楽を練習する場所がないということなのです。例えば映画館というのは防音装置が発達しているそうですが、あまりはかばかしくなくなったような館を自治体なり何なりが借り上げて、それを貸してくれないかというような話を聞くことがあります。もし、そういうものがあれば、かんばしくないレジャーに流れる目をちょっとぐらいはこちらに引きつけることができるのではないかというようなことを考えたりするわけです。東京のなかでこれに取組んでいて成功している例は台東区だと伺っておりますが、そんなことぐらいしか今のところは気がつかないのです。

和田　（岡山勤労青少年福祉員）　勤労青少年福祉員を１７年間やっております。周囲を見ますと県には青少年を育成する課があります。市では成人式などを大々的に勤労青少年主体で行っております。

先生方のお話のように青年のつばさであるとか青年の船であるとか勤労青少年ホームというようにいろいろ御活躍しているわけですが、難しいことではあると思いますけれども、縦か横かにもう少し一貫するというか連絡があってしかるべきではなかろうかと思います。各々行事をする場合に多少の交流はありますけれども、せっかくのそういった機能機関が横の連絡が緊密にいっていないことを非常に痛感するのです。各々目的と考え方が違うとは思いますけれども、勤労青少年の福祉の向上という錦の御旗は１本ですので、労働省においても、沢山散らばっている団体、機関をもう少し縦か横かで結んでいただくことが、将来できやしないだろうかという希望を持っております。

加藤　ありがとうございました。まことにその通りだと思います。

西関　（兵庫勤労青少年福祉員）　先ほど、市川先生からお話がありましたが、我々は理容業界ですが本当に勤労青少年が少ないのです。勤労青少年の年齢の引き上げという形で、対応策をねっていただきたいと思います。我々の業界は、勤労青少年に該当する１８～２５歳までの者の数が本当に少なく１００店舗に対して１０人程度ということです。４０歳位までの者を対象として考慮していただきたいと思います。

昔だったら椅子と鏡があればいいという時代と違いまして店舗を構えるにしても土地から家ということになると何千万円とかかりますし青少年は理容などおぼえようとしません。現在店舗を持っている家の息子とか親せきの方ぐらいしか覚えないのです。だから、今理容業界の学校にしましてもＰＲ

に大変です。生徒が少ないわけです。だから、どうしても勤労青少年の対象を４０歳ぐらいまでにしないと集っていただけず会合も何も持てないわけです。

加藤　中高年勤労者福祉法とかそういう法律が必要になってくるわけですね。

西関　私が言いたいことは勤労青少年が老齢化しているのではないかということです。

桐畑　２５歳までを大体４０ぐらいに上げて勤労青少年ホーム等を利用したいということですか。

西関　会社などに行っておられる方はべつですが、我々の業界はそういうふうにしないと勤労青少年に該当する人が殆んどないということです。

加藤　桐畑先生、今ホームは２５歳未満ですが、それ以上にしているところもあるわけですか。

桐畑　運用面におきまして２５歳以上の方でも利用できるようにしているホームが多いと思います。

加藤　２５歳以上でもいいそうです。

西関　私のところは対象にはなりませんがそういう方にも集っていただいてやっていることはやっているのです。

市川　先ほど申し上げましたけれども、中小企業の方の参加が協議会の活動のなかでも少ないわけです。それは今おっしゃったような背景があるわけです。私は神奈川県横浜にあります鶴見地区の勤労青少年福祉推進者協議会に属しているのですが、勤労青少年福祉ということで７月の第３土曜日に優良勤労青少年を表彰するわけですが現行の表彰規定のなかでは大学卒業の方というのは、どうしても対象にならないのでそうした方々をなんとか救おうということ、もう一つは年齢が高くなってきたので中堅勤労者の表彰制度を今年から発足させました。

具体的に言いますと、２５歳以下ではなくて２５歳以上３０歳未満の個人の方で勤続３年以上で職場において仕事の改善あるいはほかの方の指導的な立場にあるというような方を表彰しよう。もう一つは、２５歳以上３５歳未満の方のグループを対象にしまして同じように、職場のなかで例えば生産性の向上あるいは職場の安全、職場環境の改善等に尽力のあった方を表彰しようということで若干なりとも幅広く活動を進めていこうというのが現状です。

いずれにしましても先ほど申しましたように、大企業の場合には非常に福祉に関する施設並びに活動も進んでいるわけですから今後は底辺の中小企業の福祉活動をどのように進めていくか、ということが行政に望まれる一番重要な点だと思います。

もちろん国際化社会の問題も当然ですが、目先の問題としては、そうした問題で悩んでいる中小企業の問題をどう進めていくかというのが、これから必要ではないかと常々感じている次第です。

加藤　最初の勤労青少年ホームができたのは、たしか昭和３２年ごろだと思います。資料１９ページ表の３の「新規学卒就職者の学歴別構成比の推移」で、４５年と５８年を比較してありますが４５年には中卒者がなお20％ありました。さらに10年前の昭和３５年だと中卒者は大体３０％ぐらいあったわけです。それが５８年では６.５％になってしまいましてその一方、短大、大学卒は両方を入れま

すと３７％ぐらいになっております。当然勤労青少年福祉法の立法の趣旨は大卒などは入っていなかったわけですが、しかし、ホーム利用者の対象に大卒者を入れても少しもおかしくないと思いますし、またそういう時代がきたのだと思います。ですから、法が制定されてから担当時間がたち勤労青少年をめぐる状況も変化していますので、初めの趣旨と同じように硬直的に画一的に２５歳までで大卒は含まないなどといって肩をいからす必要は全くないので柔軟な考え方で対応すべきだと私は思います。おそらく労働省も同じような考え方を持っているのではないかと思います。

秋山　（愛媛勤労青少年福祉員）　２点ほど意見を申し上げてみたいと思います。

一点は、先ほどもお話が出ておりましたが青少年の福祉育成という面につきまして、国は労働省とか文部省とかいろいろ分かれているわけでして、それが下部にくると各々別個になって横の連絡が密でないということです。そういう点で国のほうで十分横の連絡をとって下へ流すのがいいのではないかと思います。

もう一点ですが、愛媛には老人の舟というのがありまして過去１１回実施しています。その内容はお年寄りが３００人、婦人が１００人、成年男女が１００人という参加者でいろいろお話合いをするわけです。そのなかの成年の人は先ほどからお話がありましたように国際化、いわゆる海外研修をしてみたいという希望の方がいます。先程、先生からも若者の海外研修の場を広げるとか海外研修をするようにというお話があり、また、２０代の青年がいちばん海外旅行に沢山行っているというお話があったわけです。私はスイスの大使館フランスの大使館辺りでお聞きしたのですが２０歳ぐらいの若い日本の男女が海外旅行に行くのに片道の旅費しか持っていかず、困って帰るにも帰れずバーなどで働いたり、大使館へ泣きついてくる人間が多いのでそういう無謀な計画で海外研修はしないよう日本に帰ったら国のひとに言っていただきたいということでしたので参考に申し上げます。

加藤　お役所の縄張り意識と申しますか、横の連絡が悪い縦割制度になっているという問題は毎年出てまいりまして、去年はたまたま年少労働課長が壇上に座っておりましたけれども今年は下に降りていらっしゃるので答弁するひとがいないわけでございますが、私どもも、そう思います。同じ日本の若者を扱う施設でも労働省とか文部省、運輸省、農林省と分かれていて、横の連絡があれば効果的であるのに上のほうにはなかなか話が進まないという問題は確かにございます。もう少し効率的な運用をすればいいと思いますけれども、なかなかそれがうまくいかないのです。市町村の方では、それをちゃんとうまくやっていらっしゃるそうです。知恵のある人は補助金などを全部かき集めて一つの建物を造って、そのなかで多様な活動を繰り広げているといったことがあちこちに出てまいりましたが、大変結構だと思います。

二番めのお話は、まことにその通りだと思います。なにか先生方御意見がございますか。

堀添　私も１０歳のボーイスカウトをスタートにしまして、２０歳ぐらいから青少年運動をやっているわけですけれども、おっしゃるような縦割行政をいつも問題にしておりまして、受けるところは

全部同じところであるわけですから、この問題を具体的にどうしたらいいかということなのです。

今日は労働省の主催ですが、日本には国家公務員というのはいないのではないか、省の役人しかいないのではないかという気がつくづくしたわけです。そういったことで、いつも文句を言っていたのですが、解決しない。具体的な１つのプログラム、例えば青少年の国際交流がどういう予算が組まれているのだろうかということをみると、形の上では地方では知事部局でまとめることになっており、国においては、総理府に青少年対策本部というのを作って本部長は総理大臣がなることになっています。しかし、これも屋上を重ねたようなことになる。また行事をやるだけで終るという感じが国際交流事業にもあるのです。せっかく時間と情熱をかけて民間側でやっても伝わらないところがありますので、そのへんの調和を図ること、具体的なプログラムのなかでどう効果があるかということを考慮に入れてやっていかなくてはいけないのではないかという感じがするのです。青年たちは市町村にくると、同じ人がいろいろな会合に出なければいけないということがずいぶんあると思いますし、アセアンの問題なども縦割行政で相手の国に対応していけば相手国にしたら大変迷惑だと思うのです。国内では話合えばそれこそ以心伝心の民族ですから、何となく伝わるかもしれませんけれども、相手国、例えばシンガポールとインドネシアに対し東南アジア青年の船におまえのところは５０名出せと言い、また、外務省からはアセアンの青年もあるからまた１５０名出せとかになり、同じ人が何回も来日して総理府で来たときは大変待遇がよかったが、労働省で来たら待遇が悪いというようなことになりかねない。これは、悪い日本の縦割行政を海外に輸出しているようなことになりかねないという気がします。一方我々自身の側にも、お上が決めるから何となく参加しておこう、これはこれでお付合いしておこうというような姿勢があるので、そのへんは自分の問題として考えなければいけないと思います。文句を言っているばかりでは進まないのです。

藤本　（和歌山県海南市勤労青少年ホーム館長）　本日のシンポジウムのテーマは「国際化高齢化の進展と勤労青少年」ということで先ほど来から各先生方のいろいろな御意見、私どもよくわかりますし重要な問題であろうと思います。しかし、実際問題としては、レジャーが非常に多様化しており、勤労青少年にしてもゴルフをやる方とかいろいろな面で趣味を持っているわけで現代の青少年の心を掌握していくということは非常に難しい。国際化高齢化の進展ということに対する勤労青少年の方向ということは非常に大事ですが、その前にもっと現代の青少年の心というものを深く協議していかなければならないのではないかと思っているわけです。個々の問題も大きな問題です。私の知っている昔からある青年団というのが来年あたりからなくなっていくようです。誰も青年団に参加するものがない、世話をしていくものがない。これは各人がめいめいに各方面の趣味とか分野のなかに首をつっこんでいって、まとまっていく組織がないという形になっているようでございます。非常に青少年の難しい時期であろうかと私は思いますので、こういう基本的な状態のことをもう少し勉強したいと思っております。

中野　（新潟県小千谷勤労青少年ホーム館長）　本日のテーマと直接つながりがあるかどうかわかりませんが原点にたってお伺いしたいと思います。

今日は労働省の担当の方に本音をお聞きしたいと思います。

「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」という本日のテーマですが、そのテーマのいちばん下にある勤労青少年という言葉を私はホームの館長として非常に意味の深いものと思っております。昭和４５年に福祉法が制定されまして１３年、この間、第三次の勤労青少年福祉対策基本方針が労働省から出されそれに基づき各都道府県から方針がうち出されております。第一次、更に第二次方針が出された時期に比べかなり社会情勢も変り内容もずいぶん移行してきていると思います。現在全国で５５０カ所の勤労青少年ホームが設立されています。日本全国で大体７００万人の勤労青少年がいるわけですが、このうち、勤労青少年ホームに登録している勤労青少年というのは何人かということを考えますと、統計によりますと、１ホーム平均６００人総じて３０万そこそこでしかないわけです。７００万人のうち３０万というのは極論すれば５％にしか満たない。

こういう状態を申すと労働省のほうからはまだホームが不足しているんだという答えが帰ってきそうですが、先ほどからいろいろな御意見が出ておりますようにホームの登録者の年齢の問題あるいは諸事業、諸行事に参加者の少ないというようなこと等ホームの運営についての苦労が見えるようです。私の所属するホームは、今年度は年齢を３０歳まで引き上げました。

しかし、これは非常に不本意なことでありまして、大体全人口の７％が勤労青少年と見て当らずとも遠からずという現状からして、潜在している勤労青少年がいかに多いかということを言いたいわけです。

小千谷市の場合ですと大体3,４００人の勤労青少年がいるのに登録者が６００人ということは、あとの勤労青少年はどこで何をやっているのか。これを掘りおこして法律の趣旨に基づいて職場にあっては勤労青少年福祉員あるいは福祉推進者、余暇労働にあってはホームを自分たちの施設として仲間作りを行う。これを通して社会人として人格向上ができれば法律の趣旨が生かされているといえるのではないのか。

このテーマでいう「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」という場合の勤労青少年というのは全部の勤労青少年を対象としているのだと思いますが、ホームに登録していない勤労青少年にどういうふうに呼びかけ、このシンポジウムの内容を浸透させていくのかということについて非常に難しい問題があろうかと思います。そのへん、もし御意見がありましたらお伺いいたしたいと思います。

加藤　先程、労働省の年少労働課長が壇上にいないと言ったのですが、この会場のどこかにちゃんと座っていらっしゃって話合いを聞いていらっしゃいますので念のため申し上げておきます。

今の問題は大変難しい問題で先生方の御意見を伺いたいと思います。

桐畑　潜在している若者をいかに発掘していくかということですが私も対応策は持ち合わせており

ません。おそらく近畿、東海、四国、九州、東北各ブロックで、魅力あるホームづくりをしてみなさん研究討議をなされていると思いますが、確とした答えがなかなか出ておりません。なかなかいい対応策がないというような現状でございます。

加藤　総理府のほうでも青少年の健全育成事業をしていまして、青年、少年のたくさんの団体を作って補助金を出したりして育成しておりますけれども、全体の青少年の5％よりも少しはいると思いますけれども、網にかからない青少年のほうが多い。そういう青少年が問題を起しているという実状があるわけでして、法律で勤労青少年はホームに行けといってもおかしなことになりますので、先ほど先生がおっしゃったような魅力のあるホーム作りをしてレジャー産業と競争するということ以外はないと思いますが、大都会あたりになりますと魅力のある民間の広い意味のレジャー産業でいいものもたくさん出来てきまして、なかなかホームのようなところには足が向かないという実状があるわけです。地方都市も同じような状況が広がってきているので、勤労青少年の足がホームに向くか向かないかというのは、なかなか難しいと思います。日曜日をホームの休館日にしているところが大変増えてきたというのも、日曜日は勤労青少年はきてくれないんだというので休館日にしているわけです。大変難しいことだとは思います。

渋谷　（兵庫県三木市勤労青少年ホーム館長）　予算のことですが、婦人少年室を通じたり県を通じて各勤労青少年ホームに対して補助金をいただけないかということを毎年館長会議で申し上げております。なにがしかを小さな三木のホームに年間の補助金としていただきましたら、大きな事業ができると思います。それを核にして市から取れるのです。ところが核がないから私たちは取れない、無から有は生じないわけです。労働省から2万でも3万でもいただけたら、それに対して事業をしたいからこれだけ増やせということが言えるのですが、それがないわけです。だけど、そういう形でホームができて何年になるのですか。発展的な段階にたち至らなければいけない私たちの組織なり、施設がどんどん、低下してきた、労働省からはなんとか工夫してやってくれと言われるのですが、限界があると思います。

それと同時に、労働省の直轄である勤労青少年ホームの館長として、プライドを持っております。ただし、全部都道府県を通して、ホームに参ります。私たちは県の行政なり国の行政に対してもう一歩たち入るだけの権限も地位も与えられておりません。先程からお話がありますように、勤労青少年は将来に対して大きな希望を持っています。働くということは国家に貢献するため、大きく言えば世界に貢献するために働いているのです。ただし、働いた意義がはっきり認めてもらえない、意識させてもらえないから彼等は非常にあやふやなレジャーに向いてしまって、せっかく働いたお金を捨ててしまうということなのです。

ですから、勤労のために得たお金の価値観は、私たち古いものと今の若者とは違うわけです。木村先生がおっしゃったように若い人の考え方はおのずから年輩の者とずれていくと思うのです。ずれな

いようにするのは、私たち館長とか福祉員、指導員の責任だといって責任を転嫁するのでなく、国県というものが大きく抱擁して私たちにも行政に参加する場を与えてほしいのです。

このシンポジウムに私は3年きましたが3年とも先生方は一生懸命お話してくださいますが、きれいすぎるのです。非常に失礼な言い方をしますと行政の過剰指導です。私たちは過剰指導はいらないのです。指導というものは、恰好だけの絵に書いた餅とか机の上で書いた計画だけではないと思うのです。木村先生がおっしゃったようにもっともっと肌と肌の触れあいから当然出てこなければいけないと思います。惜しいかな労働省のこのシンポジウムのなかには、私たちが切実に感じるものがないということなのです。だから、勤労青少年だけにスキンシップを強調するのではなく、それ以前に私たち指導者なり館長に対して労働省とのスキンシップがあって然るべきではないかと思います。

加藤　今の問題は本日のシンポジウムのテーマに必ずしもぴったりしているわけではございませんが、どこかで非常に深くつながっている問題だと私は思います。労働省の責任者の方もここで聞いていらっしゃるので、そういうスキンシップの問題はこれからだんだん改善されなければいけない問題だと私も思います。

堀添　私は民間の立場ですが、勤労青少年ホームの館長さんの立場から国の援助をもとめるのは結構なことだろうと思いますが、一方で非常に羨しいなと思うという気持があるわけです。私の体験を申しますと、ちょうど20年前に新宿で1軒の貸家を借りまして若い連中だけ24時間の青年の家を共同運営したわけです。1日2つ、3つの行事は行うというようなことでフル回転したのですが御承知のように無から有は生じ得ません。7年で断念せざるを得なかったのですがそこの青年から非常に優秀なひとが巣立っております。そのときは勤労青少年ホームも、少なかったでしょうし、青少年問題専門家の方もまだ少なかったのです。高度経済成長のなかで、やっと箱を作っていただいて施設中心主義といいますか、勤労青少年ホームとか青年の家とかフレンドシップセンターが出来て非常に喜ばしいと思うのです。行政の立場で一層いろいろやっていただきたいのですが、本当に羨しいという気持と同時に非常に熱心にやっていらっしゃる館長のところと、もったいないな、あれだけの施設を持っていながら何か情熱が感じられない、また行こうというような魅力がないホームもあるわけです。民間の施設で7年間で断念した立場からすればせっかくの機会を大いに生かしていただきたいというお願いなのです。我々税金を払う立場からもただ予算を要求すれば出るという時代ではないと思うのです。いろいろやむを得ないのです。民間も相当身銭を切ってやっているわけです。いろいろな立場の違いがあるでしょうけれども、お互いの連携が取れてやれれば非常にありがたいと思います。

林田　勤労青少年ホームのことについて知らぬ顔ができないと申しますのは、余暇問題研究会の委員として勤労青少年の育成について昨年と一昨年度報告を出したわけでございます。

東大の岩瀬先生を初め、9人のメンバーで構成され、この中にはホームの館長さんも入っております。

これを見ていただきますと勤労青少年ホームをどのように有効活用させていくかについて触れています。確かにホームは場所を移動していくわけにはいきません。その土地のなかでの勤労青少年の数も限定があります。夜遅くまで活用するのは女子の場合帰宅時間問題が起きるとかいろいろ館長さん方も苦労しています。この報告書では細かく現状を認識しながら問題提起し、働労青少年指導者の今後のあり方等について分析しているつもりです。ですから、労働省は何もやっていないのではなくて各々の分野、分野で、施設であるとか指導員のあり方等について、研究会で検討し、レポートをまとめ、年次年次で報告書を出しておりますので、そういうものを見ていただきますととても参考になるのではないかと思います。是非とも県に帰りましたら、この報告書を館長さん方もお読みいただきたいと思います。ホームのことも現状を踏まえながら分析しているつもりでおります。

加藤　今日のテーマは、国際化と高齢化の進展に伴って勤労青少年はどういう役割を果すべきか。また指導者はどういう役割を果すべきかというようなことで若干難しいというか、抽象的なテーマだった関係もありまして御不満の向きもあったかと思いますが、意見交換では有益な意見がたくさん出まして労働省のほうからのお土産はないそうですが、頭のほうにたくさんお土産をお詰めになってお国に帰られんことを私司会者のほうから要望いたしまして、本日のシンポジウムを閉じさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

最後に労働省年少労働課川西課長の閉会の言葉がございます。

川西　（労働省年少労働課課長）　本日のテーマは「国際化　高齢化の進展と勤労青少年」ということでございました。国際化高齢化というのは概念は非常に抽象的でございますが、今後の社会をどういう言葉で表現したらいいかというなかでこの言葉が出てきたわけです。我々は好むと好まざるとを問わずこの中に入っていきますし、また私どもが一生懸命育てております勤労青少年もそういうなかでこれからの生活をしていかなければならないということだと思います。

昭和６０年が国際青年年でございます。まだ１年と少しありますのでおそらく皆さん方の地域でもこういうテーマが今後議論されてくると思いますので、本日を最初の勉強会のスタートとして、共々学んでいきたいと思っております。テーマ以外の面で非常に厳しいお言葉もございました。

私どもは心をひきしめて、今後皆さん方共々勤労青少年の福祉のために力をそそぎたいと思っております。本日は朝からこの時間まで木村先生の話のあと加藤先生、有馬先生、垣添先生、市川先生、林田先生、桐畑先生方御指導の下にいろいろな話が出たことを嬉しく思っております。どうか、地域に帰られましたならば今日のお話を一つの糧といたしまして、これからも勤労青少年行政のためにお力添えいただければと思います。どうもありがとうございました。